

319

314

七書之兵法と現今之戰術

研究會著



始



研 究 會 著

七書之兵法と現今之戰術

全

東京兵事雜誌社

317
314

序

孫子、吳子、六韜、三略、司馬法、尉繚子、大宗の七書は嘗て兵書の極粹と稱せられたるものなり今や科學進歩し、火藥火器築城其他武器の類著しく精銳となり其結果は戰術の變化を來し七書の説く所も亦多く準據すべからざるに至れり然りと雖も其指揮官の心事統御の本性、用兵の精神、攻守の要義等に至つては何等の變化なく之を近世の戰術より見て趣味と實益とに於て又捨て難きもの多し予公務の餘暇之を

序

大正
3. 6. 13
内交

拔萃し所見を附記して本冊を得たり素より他人に
公示すべきの考えあらず其編合の蕪雜、所見の私偏
は自ら以て期する所なり。

大正三年春

研究會の一人

七書之兵法と現今之戰術目次

第一章 指揮官

第一節 指揮官の性能……………一

第二節 統帥……………四

第二章 用兵

第三章 攻撃及防禦

第一節 攻撃部署及攻撃點……………三

第二節 攻撃實行……………三

第三節 攻撃時機……………三

第四節 寡を以て衆を撃つ要訣……………四

第五節 索制……………五

六節 防 禦……………五八

第七節 陣地古領要訣……………五八

第四章 局 地 戰

第一節 河川の戦闘……………六〇

其一 河川の防禦……………六〇

其二 河川の攻撃……………六三

第二節 山地戰……………六三

其一 山地戰の防禦……………六三

其二 山地戰の攻撃……………六五

第三節 隘路戰……………六六

其一 隘路の防禦……………六七

其二 隘路の攻撃……………六九

其三 隘路内の遭遇戰……………七一

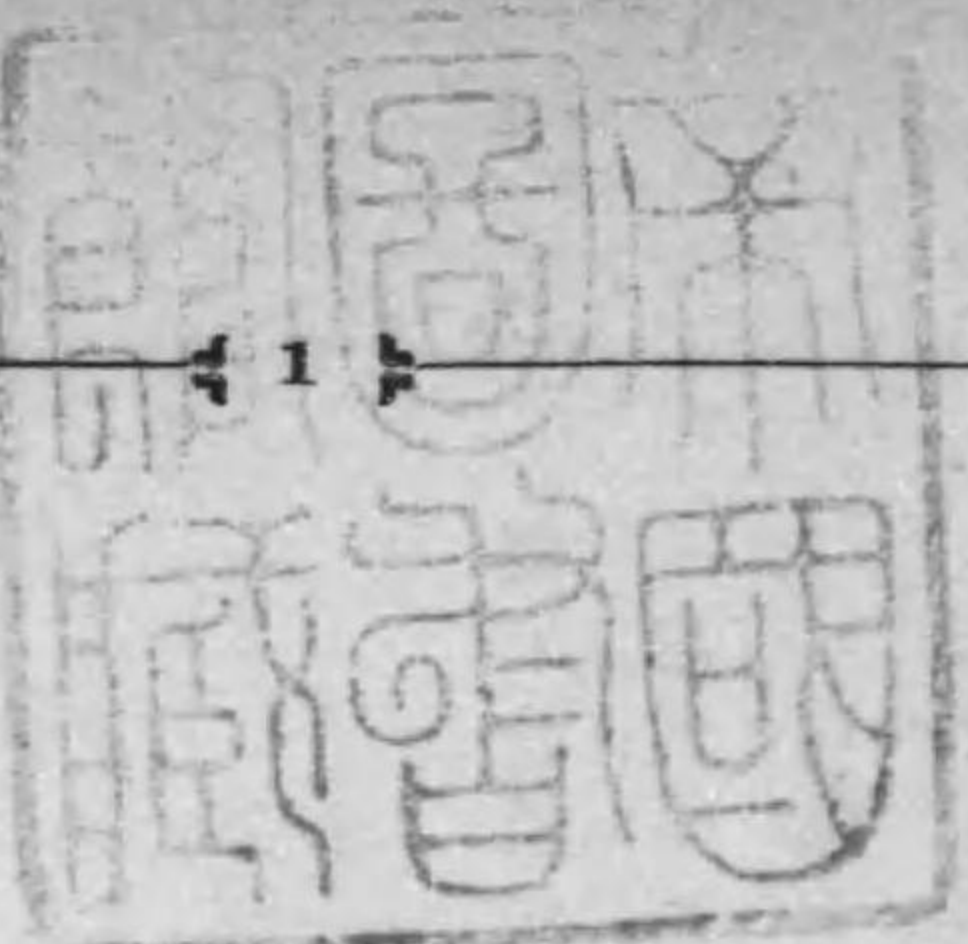
第四節 森 林 戰……………七一

第五章 騎兵戰の要訣

第六章 對騎歩兵戰

第七章 兵 卒

七書之兵法と現今之戰術目次終



七書之兵法と現今之戰術

研 究 會 著

第一章 指揮官

第一節 指揮官の性能

■孫武曰く指揮官たる者は智識信義仁愛勇氣及威嚴の五性能を備へざるべからず。

孫子始計篇曰。將者、智、信、仁、勇、嚴也。

■吳起曰く指揮官の心得べき要件五個條あり、其の一は、指揮統御にして能く大部

第一章 指揮官 第一節 指揮官の性能

將の備むべきもの

將の性能

隊を自在に統御すること、小部隊を運用するが如くなるべし、其の二は用意にして苟くも戦地に出づれば寸毫も油断あるべからず、其の三は果敢にして敵に向つては生還を期すべからず、其の四は警戒にして戦鬪勝利を得たる後と雖も始めて戦場に臨みたるの心掛なかるべからず、其の五は簡明にして命令等の煩雜に涉ることを避けざるべからず。

吳子論將篇曰。將之所慎者五。一曰理。二曰備。三曰果。四曰戒。五曰約。理者治衆如治寡。備者出門如見敵。果者臨敵不懷生。戒者雖克如始戰。約者法令省而不煩。

■大公望曰く指揮官には五材及十過なるものあり、五材とは勇氣、智識、仁愛、信義及忠實是れなり、十過とは血氣にして死を輕ずる者、性急にして遠き慮なき者、貪りて利益を好む者、慈愛にして人に忍ひざる者、智ありて心臆する者、輕しく人言を信ずる者、潔癖にして人と親まざる者、多智あるも果斷に乏しき者、剛愎にして人を容れざる者及懦弱にして事を人に任かす者は是れなり。

六韜論將篇。太公曰。將有五材十過。所謂五材者、勇、智、仁、信、忠也。所謂十過者、有勇而

輕死者、有急而心速者、有貪而好利者、有仁而不忍人者、有智而心怯者、有信而喜信人者、有廉潔而不愛人者、有智而心緩者、有剛毅而自用者、有懦弱而喜任人者。

■三略曰く指揮官たる者、智慮なければ策士去り勇氣なければ士卒恐れ輕舉妄動すれば軍隊の威嚴輕く怒を遷せば部下懼る此の故に智慮と勇氣とは指揮の爲め大切にして又其の一舉一動は深く慎まざるべからず。

三略軍識曰。將無慮則謀士去。將無勇則士卒恐。將妄動則軍不重。將遷怒則一軍懼。又曰。慮也勇也將之所重。動也怒也將之所用。此四者將之明戒也。

■太公望曰く將仁ならざれば三軍親まらず將勇ならざれば三軍銳からず將智ならざれば三軍大に疑ふ將明ならざれば三軍大に傾く將精微ならざれば三軍其の機を失ふ將常に戒めざれば三軍其の備を失ふ將強力ならざれば三軍其職を失ふ。

太公曰。將不仁則三軍不親。將不勇則三軍不銳。將不智則三軍大疑。將不明則三軍

大傾。將不精微則三軍失其機。將不常戒則三軍失其備。將不强力則三軍失其職。故將者人之司命。三軍與之保治與之俱亂。指揮官は軍隊を統御し之を運用し勝を戰場に決せざるべからず。之が爲め戰術戰略に通じ判斷正確企畫適切實行果敢なるは勿論軍隊の模範となり軍紀の本源となり活動の中心となるを要す。是れ部下の心を繫持するの徳量才智並に鞏固なる意志を必要とする所以なり。

■三略軍識に曰く將は能く清靜、平明、虚心、大度、寛仁にして彼我の情況地形に通曉し且つ軍を統禦せざるべからず。

軍識曰。將能清、能靜、能平、能整、能受諫、能聽訟、能納人、能採言、能知國俗、能圖山川、能表險難、能制軍機。

第二節 統 御

■太公望曰く指揮官たる者は軍隊を調和し部下を統一する爲め其の一舉一動に

於て喜怒與奪文武緩急各其の機に投ずる如くせざるべからず。六韜奇兵篇太公曰。一喜、一怒、一與、一奪、一文、一武、一徐、一疾者。所以調和三軍制臣下也。

■孫武曰く指揮官たる者は部下を愛撫すること愛兒の如く又部下をして己を畏敬すること嚴父の如くならしめ始めて能く死生を與にし之を戰鬥に使用するを得べきなり。

孫子地形篇曰。視卒如嬰兒。故可與之赴深溪。視卒如愛子。故可與之俱死。厚而不能使。愛而不能令。亂而不能治。譬若驕子。不可用也。

■孫武曰く指揮官たるもの能く部下を掌握して其の心を一にせしめ之を指揮すること一人を使ふが如くなるを得ば其の勝利を全ふすること必せり。

- 一 孫子九地篇曰。善用兵者。携手若使一人。不得已也。
- 二 三略軍識曰。能使三軍如一心則其勝可全。

■尉繚子曰く指揮官は精神にして部下は手足なり手足は其の精神に従て動作するものなり此の故に指揮官たる者は常に躬行率先以て部下を勵すことを勉めざるべからず。

一 尉繚子攻權篇曰。將帥者、心也。群下者、支節也。其心動以誠則支節必力。其心動以疑則支節必背。

二 尉繚子戰威篇曰。戰者必本乎率身以勵衆士。如心之使四支也。

三 司馬法定爵篇曰。將軍、身也。卒、支也。伍、拇指也。

■六韜三略に曰く指揮官たる者は宜しく部下と饑寒困苦を與にすべし。

一 三略軍讖曰。軍井未達。將不言渴。軍幕未辨。將不言倦。軍竈未炊。將不言飢。冬不服裘。夏不操扇。雨不張蓋。是謂將禮。

二 六韜立將篇曰。士未座勿座。士未食勿食。寒暑必同。

三 六韜勵軍篇曰。將冬不服裘。夏不操扇。雨不張蓋。名曰禮將。將不身服禮。無以知士卒之寒暑。出隘塞。犯泥塗。將必先下步。名曰力將。將不身服力。無以知士卒之勞。

苦。軍皆定次。將乃就舍。炊者皆熟。將乃就食。軍不舉火。將亦不舉。名曰止欲。將不身服止欲。無以知士卒之飢飽。將與士卒共寒暑。勞苦飢飽。故三軍之衆。聞鼓聲則喜。聞金聲則怒。高城深池。矢石繁下。士爭先登。白刃始合。士爭先赴。士非好死而樂傷也。爲其將知寒暑飢飽之審。而見勞苦之明也。

四 尉繚子戰威篇曰。夫勤勞之師。將必先己。暑不張蓋。寒不重衣。險必下步。軍井成而飲。軍食熟而後飯。軍壘成而舍。勞佚必以身同之。如此則師雖久而不老不弊。

率先躬行は指揮官の形と精神とを以て部下を暗示し無意識に指揮官に附隨行動せしむるの催眠的效果あるものなり故に指揮官の精神と實行とが部下の眼底に透徹するや彼等は無我無識に之を模倣し之に従屬し指揮官の欲する所を實行するに至る。

此の際に於ける指揮官は實に催眠術施行者にして部下は被術者なり此の作用旺盛ならんか被術者は理由も考へず賞罰も思はず危険悲惨身死地に向つて知らざるに至る此の境地に入りての率先躬行は益々光輝あるなり

徳を先に
し刑罰を
後にす。

■季靖曰く衆を用ゆるは心一なるに在り。

季靖曰。用衆在心一。心一在中禁祥去疑儻主將有所疑則群情搖。群情搖則敵乘覺而至矣。

指揮官の決心は須く堅確ならざるべからず決心動搖すれば指揮自ら錯亂し部下従つて遲疑す(歩兵操典)。

統御の要は自己の精神意思を統一し其の力を以て部下を暗示するにあり自己の精神意思統一せず何を以てか部下の精神意思を統一し之を自己に歸依合致せしめ得んや統御は實に自己と部下との歸一するに依るなり將の精神意思動搖し部下に之を禁ぜんとするも到底克くする所にあらざるなり。

■尉繚子曰く民を率ゐるには禮信を先にし爵祿を後にし廉耻を先にし刑罰を後にし親愛を先にし後其の身を制束す此の故に戦は自ら率ゐて衆士を勵まざるべからず。

尉繚子曰。古者率民必先禮信而後爵祿。先廉耻而後刑罰。先親愛而後律其身。故戰

者必本乎率身以勵衆士。如心之使四肢也。將不勵則士不死節。士不死節則衆不戰。

禮信。廉耻。親愛を先にし爵祿。刑罰。拘束を後にするは統御の要義なり人未だ我に服せず我を信ぜず耻を知らざるに之に刑罰を施さんか單に怨恨を招かんのみ人未だ我を信ぜず我に服せず耻を知らざるに徒らに之を拘束するも到底潰廢を免れざるなり况んや爵祿の如き何等其の效を成さざるのみならず或は却て彼等を驕慢にし彼等を狎狃せしむるに至る。

■尉繚子曰善將は愛と威とを適當にせざるべからず。

尉繚子曰。夫不愛説其心者不我用也。不威嚴其心者不我舉也。愛在下順。威在上立。愛故不二。威故不犯。故善將者愛與威而已。

■尉繚子曰く將は最も人事を謹まざるべからず

尉繚子曰。天時不如地利。地利不如人和。古之聖人謹人事而已。人事公正ならずんば軍治まらず軍紀従つて紊るべし人に不服なく不和なく各

愛威適任

人事を慎む。

々其の分を守り其の職に忠にして軍隊の精銳得て期すべし然れども人事極めて錯綜し情事盤根し易し軍を統ぶるもの殊に注意せざるべからざるなり。

■三略に曰く主將は務めて人心を集撃せざるべからず人心を集撃せざれば事成らざるなり。

三略曰。夫主將之法務擊英雄之心。賞祿有功。通志於衆。故其衆同好。靡不成。其衆同惡。靡不傾。

人心を集撃するに徒らに利祿勳爵を以てすべからず徒らに權謀術數を以てすべからず。人心集撃の眞諦は唯だ徳量を以てするに在るのみ。才智辯舌を以て人を籠絡し權術を以て人を瞞着するが如きは未の未にして極めて危険なるものなり。

■三略に曰く軍國の事は衆心を察して百務を施すべし此の故に克く衆心に應じ適當の道を以て之に處せざるべからず即ち危殆にあるものは之を安じ、恐懼しある者は之を歡ばしめ、敵より叛き來る者は之を拒還し、冤者は其の根本を原索

して之を雪ぎ、訴ふる者は其の理否を審にし正しく判すべく卑者も能あらば之を費用し、強慢なるものは之を抑制し我に敵し我に反くものあらば之を殲滅し貪る者は利を以て之を誘ひ願望欲求あるものは之に従つて用ひ、妄りに妖言怪奇を畏るゝものは之を隱匿して影響なからしめ智謀あるものは之を近け、讒するものは之を反復審議し、人を毀るものは其の眞疑を詮索し謀反者は之を廢滅し横逆なる者は之を挫折し、滿ちて猶ほ望む虞れある者は之を缺損せしめ、歸服するものは之を招き降服する者は之を活し、降參するものは之を助くるべし

三略曰。軍國之要。察衆心。施百務。危者安之。懼者歡之。冤者原之。訴者察之。強者抑之。敵者殲之。貪者豐之。欲者使之。畏者隱之。謀者近之。讒者覆之。毀者復之。反者廢之。滿者損之。歸者招之。服者活之。降者服之。

■三略に曰く兵を用ゆる禮を崇くし祿を重くするにあり人を用ゆるの道は爵を以て尊くし財を以て賑し、接するに禮を以てし勵すに義を以てすべし。

三略曰。夫用兵之要在崇禮而重祿。禮崇則智士至。祿重則義士輕死。故祿賢不愛財

義を以て
勵ます

賞功不踰時。則下力并而敵國削。

夫用人之道。尊以爵。贍以財。則士自來。接以禮。勵以義。則士死之。

■吳起曰。凡そ國を制し軍を治むるには。之に教ゆるに禮を以てし之を勵すに義を以てし耻あらしむべし。

吳子曰。凡制國治軍。必教之以禮。勵之以義。使有耻也。夫人有耻。在大足以戰。在小足以守矣。

■司馬法に曰く。人は愛に死し怒に死し威に死し義に死し利に死す。

司馬法曰。凡人死愛。死怒。死威。死義。死利。

將は人の死命を制す如何にして彼等を死せしむべきか。是れ將の工風あるべきことなり。這般の消息を解す。統帥の事易々たるのみ。

■三略軍識に曰く。良將の軍を統ぶるや。仁慈惠常に精氣を蓄へ。卒身下を率ゆ。

軍識曰。良將之統軍也。恕已而治人。推惠施恩。士力曰新。戰如風發。攻如河決。故其可聖而不可當。可下而不可勝。次身先人。故其兵爲天下雄。

仁慈惠
氣を養ふ

受制下、不

軍隊統帥
上の患

■三略軍識に曰く。士卒は抑制すべくして驕らすべからず。將は楽しむべくして憂べからず。謀は深かるべくして疑ふべからず。士驕れば下。順はす將憂ふる時は内外信ぜず。謀疑ふときは敵國奮ふ。

軍識曰。賢者所通。其前無敵。故聲下而不可驕。將可樂而不可憂。謀可深而不可疑。士驕則下。不順。將憂則内外不相信。謀疑則敵國奮。以此攻伐。則致亂。

■司馬法に曰く。不服。不信。不和。怠疑。壓攝。支離。膠泥。鬱屈。煩亂。縱肆。崩墜。緩弛。は戰患なり。

司馬法曰。不明。不信。不和。怠疑。壓攝。技柱。詘煩。肆崩。緩是謂戰患。

■司馬法に曰く。驕。憚。沈滯。虞懼。事悔あるを毀折と言ふ。

司馬法曰。驕々。憚々。吟嘖。虞懼。事悔。是謂毀折。

■三略軍識に曰く。將の威をなすものは號令なり。戰の全く勝つ所以は軍政なり。士の戰を輕する所以は命を用ゆればなり。故に命令は變改あるべからず。賞罰は必ず信あるべし。

命令、號

軍識曰。將之所以爲威者號令也。戰之所以全勝者軍政也。士之所以輕戰者用命也。故將無選令賞罰必信如天如地。乃可使人士卒用命。乃可越境。

尉繚子曰。善く兵を用ゆるものは衆人の心を自己に一致せしめ能く信頼して疑ひなからしむべし。疑なからしめんと欲せば自ら疑心あるべからず。而して命令を屢々變すれば衆信頼せず。信頼せずんば以て死力を竭すなし。

尉繚子曰。善用兵者能奪人而不奪於人。奪者心之機也。令者一衆心也。衆不審則數變。數變則令雖出衆不信矣。故令之法小過無更。小疑無申。故上無疑令。則衆不二聽。動無疑事。則無不二志。未有不信其心。而能得其力者也。未有不得其力。而能致其死戰者也。

尉繚子曰。民と雖も死を惡み生を欲す。而かも之をして敢て命を聽かしむるものは號令嚴明。法制審なるを以てなり。尉繚子曰。民非樂死而惡生也。號令明。法制審。故能使之前明賞於前。決罰於後。是以

發能中節動則有功。

吳起曰。號を發し令を布ひて人聞くことを樂み。師を興し衆を動かして人戰を樂み。兵を交へ刃を接して人死を樂む。此の三者は人主恃む所なり。嚴明之事は恃む所にあらず。

吳子曰。夫發號布令。而人樂聞。興師動衆。而人樂戰。交兵接刃。而人樂死。此三者人主之所恃也。嚴明之事。臣不能患。難非恃也。

是れ蓋し賞罰を嚴明にするが如きは主にあらずして樂んで號令に服従し樂んで戰闘に従ひ樂んで生命を捨てしむる如くするを肝要とするものにして將たる者須更くも忘るべからざる金言なり。

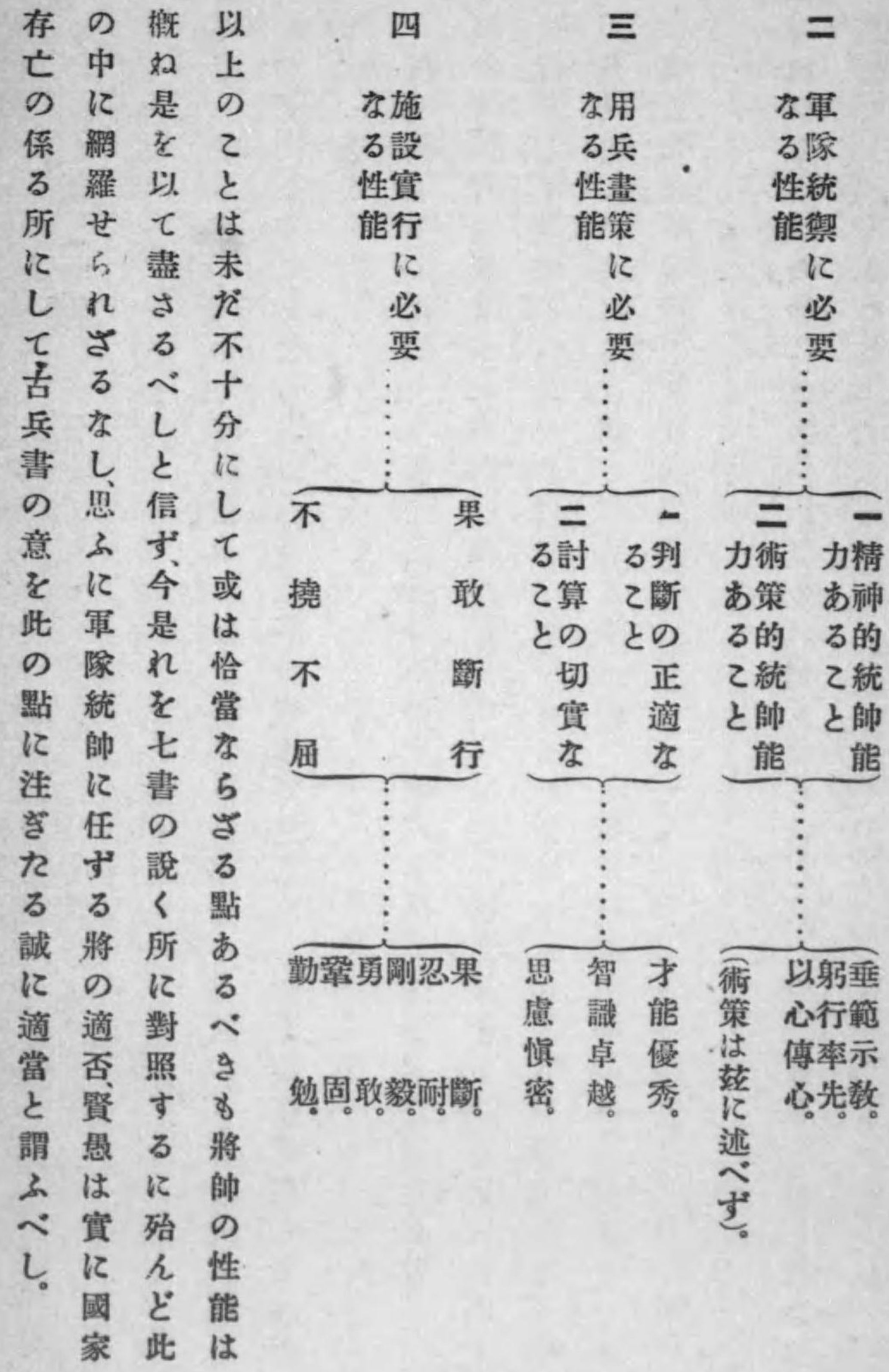
號令及命令は指揮官の部下に與ふる暗示なり。部下は此の號令又は命令により暗示せられ指揮官の意圖の如く行動すべし。暗示の效は其の施術者の精神堅く其の態度嚴明其の暗示の尖銳明快なるに従つて大なるものとす。此の故に號令、命令は簡明尖銳なるべく其の下令者の態度言語文章は森嚴にして威烈あり透

徹力大ならざるべからず、反覆常なきが如きは此の點に於て最も不利なり、暗示にして眞に効果を呈すれば無言裡に死せしむこと難きにあらず、將の性能は古今内外に亘りて異畫ことなし蓋し將は能く軍隊を成立統治し能く之を指揮統率し、畫策實施適切にして勝利を得ること古今内外何等の差異なければなり此の故に軍隊指揮官としての性能は之を左の各項に分解して觀察するを要す。

- 一 軍隊の統治成立に必要な性能。
- 二 軍隊統禦に必要な性能。
- 三 用兵畫策に必要な性能。
- 四 施設實行に必要な性能。

以下是等性能に就きて記述し之を古人の述ぶる所に比較すべし。

- 一 軍隊の統治成立
 - 一 吸着信賴の徳
 - 二 軍紀の緊肅な
 - 三 軍政の適切な
- 二 仁恕慈愛恭敬寛裕
- 三 信義公明廉潔
- 四 賞罰嚴明
- 五 許禁明確
- 六 與奪公正等
- 七 施設恰適



第二章 用兵

決心及計
術

尉繚子曰く速に決心を定め豫め計畫を立てるは用兵の秘訣なり若し計畫豫め立たず決心速に定まらざるときは事に臨んで進退決し難く遲疑逡巡して必ず失敗に陥るべし。

尉繚子勸卒令篇曰夫早決先定若計不先定慮不早決則進退不定疑生必敗。

高級指揮官は諸情報と自己の觀察とに依り戦闘一般に關する決心を定む即ち如何にして攻撃すべきや防禦すべきや或は持久戦をなすべきや等是れなり之が爲めには周到なる思慮と迅速なる決斷とを要す戦闘の効果は一に懸りて其の當否に在るものとす步兵操典。

孫武曰く用兵の妙は迅速果決なるに在り徒らに巧妙を求め重きを持し久きに彌るは名將の爲さざる所なり。

迅速果決

18

孫子作戰篇曰兵聞拙速未觀巧之久也吳明徹曰名將兵貴在速。

迅速果決の要は之を左の三方面より見るを得。

- 一 は即ち我が精神に對するものなり凡そ事を行ふや其の行ふの前に於て我が精神意思の集中を來し自ら緊張し氣鋭に力強きものなり此の緊張時に於て事を爲せば何等勞力の強要を須ひずして成功すべきも既に此の緊張を缺くに至るや氣鈍く力衰へ大なる鞭撻と刺戟とを要するものとす。殊に群集の心理は其の刺戟其動機を利用し騎虎の勢を以てするを有利とす之に時間を與へて心理を冷靜ならしめんか意思精神の分裂を來し疑惑思考の餘地を生じ爲めに其の氣鈍く其力衰へるに至り成功困難となるものなり。
 - 二 は即ち敵の精神に對するものなり我が神速明快なる行動は彼をして被動に陥らしめ或は應接を困難にし其の方策を講ずるを得ざらしめ遂に我に附隨するに至らしむるものとす。
- 反之我が緩漫遲滯せる行動は彼に事をなすの時間を與へ彼は我が意思精神

19

を分裂せしめ其の鋭氣を推くの方策を施すに至らしむべし。

三 は即ち臨機應變の妙用に對するものなり機は再び現れず之を捕ふれば成
功容易なるも之を失へば困難なり變も亦然り苟くも之に臨み之に應ぜんと
欲せば機を逸し變を失はざるを要す是れ用兵の迅速果決なるを要する所以
なり我が要務令が遲疑逡巡を誡むるに見れば蓋し思半ばに過ぎん。

■孫武曰く用兵の妙訣は先制を占むるにあり先制とは我れ能く敵を致し而かも
敵に致されざる是れなり。

孫子虛實篇曰善戰者致人而不致於人。

■季靖曰く千章萬句人を致して人に致されざるに出てず

季靖曰千章萬句不出乎致人而不致於人而已。

■季靖曰く兵は人を致すを貴んで之を拒くを欲するに非ず。

季靖曰兵貴致人非欲拒之也。

先制加動の效は之を彼我兩方面に就きて見るを可とす我れ先制加動に出づ

れば我が精神意思は統一せられ一定方向に向つて活動するが故精銳にして
分裂散漫ならず且つ一度對者の精神意志を制御するに至るや疑惑なく躊躇
なく其の活動益々旺盛となり之を壓倒するの力愈々加はるべし之に反し被
動即ち對者に致されたるものは其の精神意思の統一困難に分裂散漫となる
を以て精銳なるを得ず且つ疑惑躊躇從て生じ且つ自己を守るに急にして對
者の過失缺陷を發見し若くは之に乗ずるの餘裕なく對者の活動旺盛なるに
從ひ益々沈降消極となるべし此の故に先制は我が活動力を高め多少の缺陷
あるも敵をして之を利用するを得ざらしめ而かも敵の缺陷は克く之を利用
し疑滞なく其の初志の貫徹に邁進せしむるものにして實に成功の第一要義
なり千章萬句人を致して人に致されざるに出てず古人我を欺かざるなり。

■太公望曰く用は秘密より大なるはなく、動は不意より大なるはなく、謀は不識よ
り大なるはなし。

大公曰用莫大於玄默。動莫大於不意。謀莫大於不識。夫先勝者先見弱於敵。而後戰

者也。

用兵は敵の動靜に從ひ情況に通じ機變に應ぜざるべからずとは現今と雖も尊重すべき銘鉞なり此の故に用兵は深玄秘密にして人に知らしむべからず其の動くや又敵の不意に乗ずべく其の計謀や人の意表豫想の外に出づるを可とす。

■三略軍識に曰く將の謀は密なるべく衆は一なるべく敵を攻むるや疾なるべし。

軍識曰。將謀欲密。士衆欲一。攻敵欲疾。將謀密則奸心閉。士衆一則軍心結。攻敵疾則備不及設。軍有此三者則計不奪。

不意の作用は心理の平衡を破り恐怖若くは驚愕を來すものとす驚愕恐怖は之をして直に被動消極の精神に陥らしむるのみならず狼狽周章せしめ其の結果は慎密周到なる措置を缺かしむるものとす此の故に我が不意の行動は敵の意表に出て、其の對應を困難ならしむると共に之を消極的精神に陥落し徒らに此の範圍に没頭せしめ我が成功を容易ならしむるものとす。

■太公望曰く夫れ先づ勝つ者は敵の弱點を見て戰ふものなり物に死生あり天地の形に因る此の形勢を見ずして戰へば必ず敗る勝利を得る道は形勢を見て之に應じの其之に乗ずるや不撓不屈其の信ずる所を斷行し勝たざれば止まず此の故に其の初め勝算なくんば起たざるなり。故に曰く恐懼なく猶豫なし用兵の害猶豫最大なり三軍の災狐疑に過ぐるなし善く戰ふ者は利を見て失はず時に遇つて疑はず一度決するや猶豫せず此の故に其の敵を襲ふに迅雷疾風の如し。

太公曰。夫先勝者先見弱於敵。而後戰者也。中略。物有死生因天地之形。故自未見形而戰難。忽必敗。善戰者居之不撓。見勝則起。不勝則止。故曰無恐懼。無猶豫。用兵之害猶豫最大。三軍之災莫過狐疑。

善戰者見利不失。遇時不疑。失利後時反受其殃。故智者從之而不失。巧者一決而不猶豫。是以疾雷不及掩耳。迅雷不及瞑目。赴之若鶩。用之若狂。當之者破。近之者亡。孰能禦之。

事の成功は其の事の成功すべき確信に基く斷乎たる努力によりて求め得べし

成功の確信は其の成功を擔保する條件の捕捉にあり此の故に成功は斯の如き擔保の捕捉を第一要件とす、我れ敵の弱を捉て勝利を確實し斷乎として戦はゞ其の成功疑なかるべし凡そ指揮官確信せば其の意思は統一して鮮明堅固となるを以て態度言語文章亦悉く鮮明となり部下を暗示するの力強大なるが故に部下も亦意思の統一を來し敢爲力銳利となり此の間に些の遲疑惶惑なきに至るべし而して遲疑惶惑なき我が斷乎たる措置は敵をして益々從屬的精神に陥らしむるものとす。

■太公望曰く將は天道、地理、我軍の情況並に敵の動靜、陣地城壘の虛實、軍隊士卒の配置等を知らざるべからず。

太公曰。將必上知天道、下知地理、中知人事、登高下望以觀敵之變動。望其壘即知其虛實。望其士卒則知其去來。

凡そ戰鬪に關する各級指揮官の決心は任務地形及敵情の判斷に基くものとす然れども任務は決心の基礎にして地形の不利、敵情の不明等に依り躊躇すべき

ものにあらず(步兵操典)。

■尉繚子曰く將は天地人に制せられず又心目耳を蔽障せらるべからず。

將者上不制於天下、不制於地、中不制於人、寬不可激怒、清不可事、以財、夫心狂目盲耳聾以三悖率人者難矣。

將の心は澄み將の精神は平明にして執着なく偏移なきを要す一に執着し一に偏移すれば他は自ら虚空となるべく此の間混濁傾頽を免れず空虚混濁傾頽は必ず過失疎漏を來すものなり從て其の措置適切なる能はず勝を得ること困難となるべし此の故に將は天地人何物にも制せられず金錢利祿に惑はされず喜怒哀樂哀惡欲にも紊されず此の如くして初めて軍を率ひ勝利を期し得べし、情の奴隸、慾の奴隸となり心目耳狂亂盲聾せば何を以てか措置の恰當を期し何を以てか軍隊を統御し得ん。

■大公望曰く勝敗の前徴は必ず先づ其の精神に見はるゝものとす明將は敵人の言語舉動を候察して其の強弱を知り以て勝敗の徴を判斷するものとす。

六韜兵徵篇。太公曰。勝負之徵精神先見。明將察之。其效在人。謹候敵人出入進退。察

勝利は誤
り少なき
すものに歸

其動靜言語。

■李靖曰く兵を用ふるは猶ほ棋を圍むが如し其の力相均しきに方り纒に一着を誤る者終に其の敗を救ふこと能はず古今勝敗の決は概ね此の一着を誤るに原因す況んや其の誤る所多きものに於てをや。

唐太宗李衛公問對李靖曰大凡用兵譬如奕棋兩敵均焉一着或失竟莫能救是古今勝敗率由一誤而已況多失者乎。

勝敗は過を冒すの多少に依つて決す我も過ち彼も過ち而かも過ち無きは欲して殆んど得べからざるなり然れども過失にして幸に敵の利用する所とならざるものあり直に利用する所となるものあり又は偶然に甚大なる影響を生ずるにあり唯だ吾人の須臾も忘るべからざるは我が過失をして彼に利用せしめざらんとして欲せば彼をして常に被働的地位に在らしむるにあり換言すれば我は常に加働的に行動し敵をして自ら守るに急ならしむるにあり此の點に於ても亦攻者は勝利の一條件を有するものとす。

彼我情況の對比。

敵の動靜情況に應じて決す

敵情を察し好機に乗す

情況に應じ變化す

■司馬法曰く大小堅柔部署衆寡等を比較するを戰の法と言ふ。

司馬法曰大小堅柔參伍衆寡風雨是謂戰權。

■太公望曰く用兵は敵の動靜に従ひ情況に適し機變に應ぜざるべからず。

太公曰勢因敵家之動變生於兩陣之間奇正發於無窮之源。

■太公望曰く戰勝の術は密に敵狀を察知し好機を逸することなく速に其の不意を撃つに在り。

六韜兵道篇太公曰兵勝之術密察敵人之機而速乘其利復疾擊其不意。

■孫武曰く夫れ戰術の情況に應じて變化すべきは猶ほ流水の地形に應ずるが如し敵狀及地形に應じて其の虛實を判斷し以て戰術上の原則を巧みに活用するは戰勝の要訣なり。

孫子虛實篇曰夫兵形象水水之形避高而趨下兵之形避實而擊虛水因地而制流兵因敵而制勝故兵無常勢水無常形能因敵變化而取勝者謂之神。

敵將に従
て策畫す

敵情に應
じて措置

氣機。地
機。事機。
力機。

■ 吳起曰く戰の要は敵將の人格才能により策畫するにあり。
吳子曰。凡戰之要必先知其將而窺其才。因其形而用其權則不勞而功舉。

■ 三略に曰く凡て我が措置は敵情に應ずべし此の故に敵動かば其の乘すべき機を伺ひ敵近づかば其の來襲に備へ敵強ければ策略を以て之に勝つを計り敵精銳強盛ならば暫く之を避け敵勢盛なれば暫く之を待て敵剛暴なれば之を殺安して徐に之を屠り敵狂悖なれば我が正義を以てし敵將卒親睦なれば我れ之を離間し敵の行動の初鋒を挫き敵情形勢によりて之を破り間諜を放ちて之を過たしめ術策遺漏なく計つて敵を網羅すべし。

三略曰。敵動伺之。敵近備之。敵強下之。敵佚去之。敵陵待之。敵暴殺之。敵悖義之。敵暴携之。順舉挫之。固勢破之。放言過之。四網羅之。

■ 吳起曰く兵に氣機、地機、事機、力機の四機あり。

吳子曰。凡兵有四機。一曰氣機。二曰地機。三曰事機。四曰力機。三軍之衆百萬之師張

地形に依
る。

御、勇巧。

偵察。

■ 孫武曰く地形は戰術上に至大の關係を有す指揮官の敵狀を判斷するに方り最も願慮すべきものは地形なり能く地形を判知して之を戰に利用すると否とは勝敗の依りて分るる所なり。

孫子地形篇曰。夫地形者。兵之助也。料敵制勝。計險阨遠近。上將之道也。知此而用戰者。必勝。不知此而用戰者。必敗。

■ 司馬法に曰く戰には術策を要し、闘には勇氣を要し、配備は巧みなるを要す。

司馬法曰。戰權也。闘勇也。陣巧也。

■ 司馬法に曰く敵に遠き時は斥候を以て搜索し近き時は之を觀察す。

司馬法曰。凡戰間遠。觀近因時。因財貴信。惡疑。

第三章 攻撃及防禦

■李靖曰く凡そ攻撃は獨り敵の城塞を攻め敵の陣地を撃つのみならず必ず心を攻むるを要す又防禦に於ては獨り我が城壁を禦き我が陣地を守るのみならず必ず我が氣を守るを要す。

唐太宗李衛公問對。李靖曰。夫攻者不止攻其城擊其陣而已。必有攻其心之術焉。守者不止完其壁堅其陣而已。必也守吾氣而有待焉。

攻撃の利とする所は我が志氣旺盛にして敵の志氣を挫折するにあり而して其の攻撃の疾速なると敵の意表に出づると兵力の優勢を占むるとに従ひ其の成果益々大なり。

此の故に攻撃は單に敵陣堡壘の攻取を行ふに止まらず先づ我が氣を以て敵の氣を奪ひ之を制壓して守勢消極に陥らしむるを要す。攻撃の要訣此を措きて他

に在らざるなり軍隊指揮官は自己の斷乎精銳なる攻撃精神を以て軍隊の攻撃精神を旺盛ならしめ志氣を振興し以て敵をして形而の上下に於て益々被働的位置に陥らしめ遂に發展振起するの餘地なく沈滯凝固畏縮又畏縮遂に敗潰するの外出づべき所なからしめざるべからず攻撃部署攻撃實施の如きは是に依りて光輝を放つべし此の精神的靈動なからんか部署實施の如きは畢竟一死物のみ防禦の利は克く地理に通じ克く地物を利用し我が火器の効力を發揮するに在り然れども其の精神平靜にして懈怠粗漫なく疑惑なく敵に致されず常に有爲發展を企圖するにあらざれば以て眞に防禦の目的を達する能はず敵の行動に附隨し徒らに心氣を勞し疑惑せんか遂に悲觀と絶望とを來さざるを得ざるべし此の故に防禦とは單に陣地城壘を守備するに止まらずして實に守者其の人の心氣を守り平靜にして懈怠粗漫なく又敵に制せられざるを要すること古今此の變戻なし。

■太宗曰く攻守の二事其實孫子の所謂善く攻る者は敵其の守るべき所を知らず、

善く守る者は敵其の攻むべき所を知らざるの一法か。

大宗曰。攻守二事其實一法歟。孫子言善攻者敵不知所守。善守者敵不知其所攻。

凡そ攻撃は勝利を得べき唯一の手段なり故に指揮官は状況已むを得ざるときの外常に攻撃を決行すべし。攻撃の要は剛健なる意思を以て専心敵に向ひ勇進するに在り(歩兵操典)。

第一節 攻撃部署及攻撃點

■孫武曰く攻撃の要領は敵の弱點に向ひ其の不意を撃つに在り。

孫子始計篇曰。攻其無備。出其不意。

六韜臨境篇。太公曰。擊其不意。攻其無備。

■吳起曰く攻撃點を選定するには必ず先づ敵の虚實を偵察し然る後其の弱點に乗すべし。

吳子料敵篇曰。用兵必須審敵虚實而趨其危。

攻撃點は状況特に地形を判断し陣地の弱點若くは敵の爲め最も危険なる方向に選ぶべし(歩兵操典)。

攻撃は其の實施疾速なると敵の意表に出づると兵力の優勢を占むるとに従ひ成果益々大なり(戰術書)。

攻撃點に優勢なる兵力を使用するは攻撃部署の要訣なり此の際一部の兵力を以て敵線の他部に向はしめ主力の攻撃進捗を容易ならしむること肝要なり。攻撃點は状況特に地形を判断し陣地の弱點若くは敵の爲め最も危険なる方向に選ぶべし(歩兵操典)。

第二節 攻撃實行

■孫武曰く攻撃戰に於て指揮官性急に失し一時の怒りに驅られ悉すべき手段を悉すことなく妄りに強襲を行ふときは無益の損害を受くること必ず多から

ん。

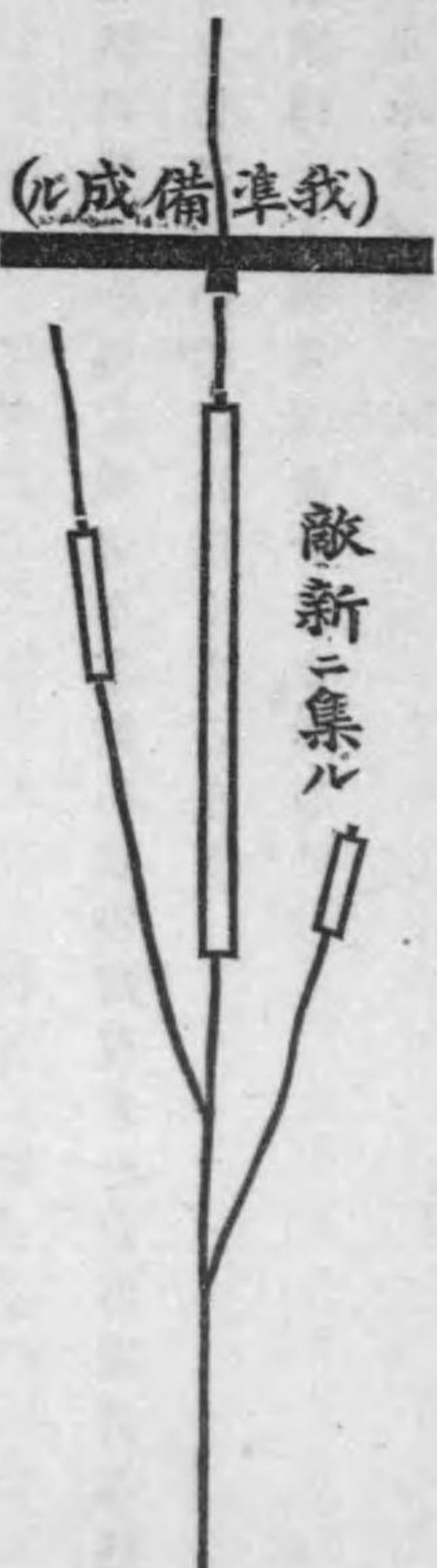
孫子謀攻篇曰。將不勝其忿而蟻附之。殺士卒三分之一而不拔者。此攻之災也。攻撃は射撃を以て敵を制壓し突撃を以て之を破摧するを要す此の故に無益の損害を避けて敵に近接し威力ある突撃に依りて之を破摧殲滅するを計らざるべからず我れ白兵を用ふるに至らずして早く既に多大の損害を被り自滅するに至るか或は然せざるも再び攻撃を行ふの氣勢を失ふに至らんか是れ自ら敗滅に陥るものなり此の故に攻撃は慎重なる計畫部署並に實施に依り我が損害を少くし以て其の成果を大ならしむることを圖らざるべからず粗漫驕勇暴虎馮河の舉動は決して成功を招くの道にあらざるなり。

第三節 攻撃時機

■太公望曰く敵人新に集る撃つ可し。

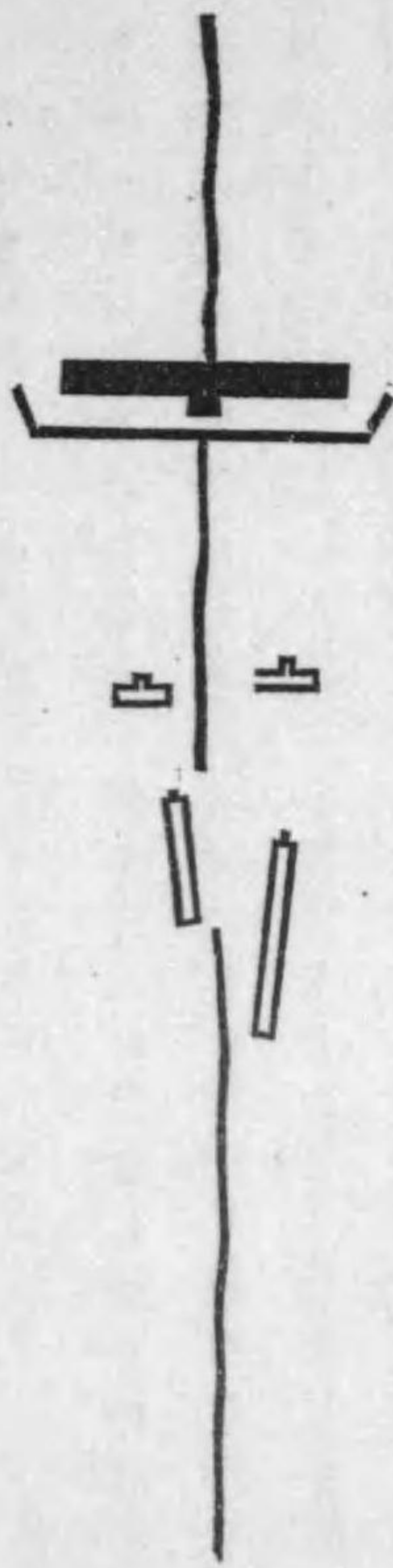
太公曰。敵人新集可撃。

是れ蓋し敵未だ戦備整はざるの時にして之を今日より言へば未だ十分なる展開を行ひ得ず未だ十分なる配置に就かざるの時なり。



斯の如きの時は我が全力を以て敵を各個に撃破し得るが故に勝算あればなり之を現今の遭遇戦に就きて見るも此の要領に毫も異なる所なし。遭遇戦に於ては先づ展開を完了し戦備十分なるもの未だ展開を終らず戦備不完全なるものを壓倒し得べし此の故に速かに展開を完了することは此の如き情況に於ける唯一無二の要求なり。是れ操典に於て特に先制の利を占むるを肝要なりとし且つ敵に先ち展開を終らしむるを必要とする所以なり。

今太公の説く所を見るに我れ先づ集結して敵が後れて新に到着するの時機に之を撃つに在るが故に其の本旨とする所は全く相同じ。又我れ豫め陣地を占領し敵兵前方に出現し戦備未だ整はざるに乗ずるが如き



或は我れ豫め一地に兵力を集結し敵の出現して其の戦備の整はざるに乗ずるが如き皆な此の要旨に基くものなり。

■太公望曰く人馬未だ食せざる撃つ可し。

人馬未食可撃。

是れ戦備未だ整はず人馬餓渴せるの時に乗ずるの謂にして敵兵疲勞し持久し能はざるが故に我に勝算あるなり。

■太公望曰く天の時順ならざる撃つ可し。

天時不順可撃。

隆冬嚴寒盛夏時の如き或は大風甚雨の如き敵困扼し身體勞疲し勞力劇増し通信連絡杜絶し行動至難となり或は警戒を怠るに至るべし是れ我の乗すべきの時たり。

敵火を發して騷擾せるに乗じて撃つが如き或は風雨雷鳴咫尺を辨ぜざるの時に乗じて撃ちしが如き或は濃霧黃塵に乗じて撃ちしが如き蓋し攻者の選定すべき攻撃時機なりとす。

之を戦史に稽ふるに其の例極めて多し信長の桶狭に於ける、毛利の嚴島に於ける皆な此の類なり。

■太公望曰く地形未だ得ず撃つ可し。

地形未得可撃。

敵窮地に在り協同困難に應援不可能なるが如き或は地形全力の展開運用を許さざるが如き或は障碍阻絶の爲め進退自由ならざる時の如き我の乗すべき時

敵地形の不利に乗す

機なり。

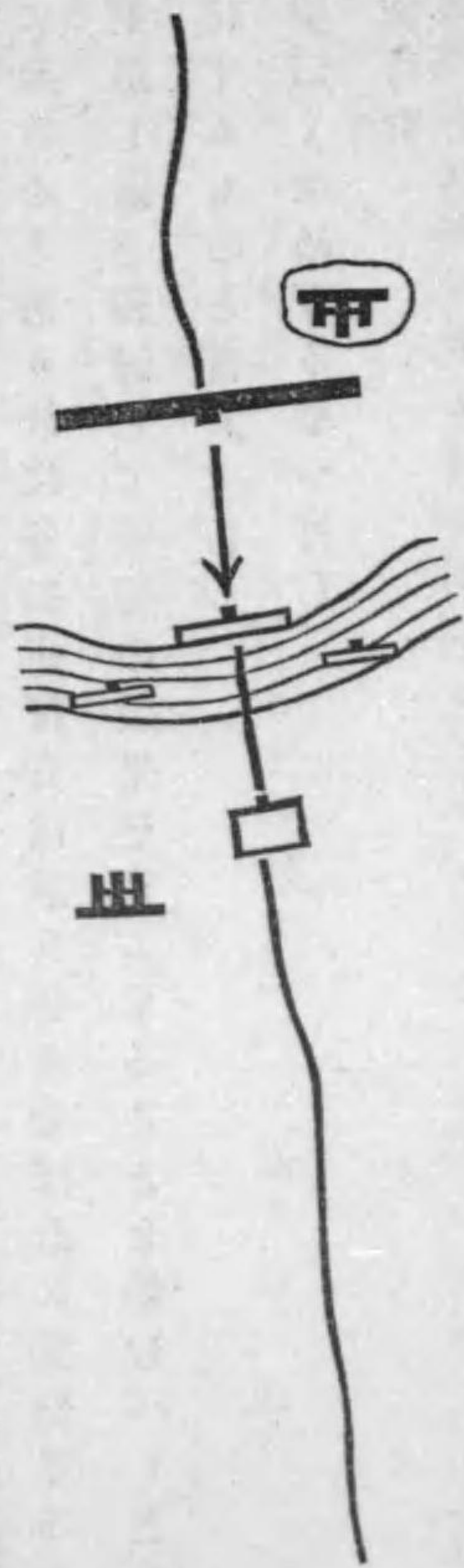


是れ蓋し敵を各個に撃破し得るの時なり。

之を現今の戦術に見るに彼の隘路中に在る敵を攻撃するが如き、即ち是れなり
更に之を廣く解釋すれば彼の高地の後退配備の如く河川後退配備の如き蓋し
我が位置に據りて敵を殊更に此の不利の地形に遭遇せしめ以て我れ乗ずるも



のにして之を敵より言へば地形未得の時なりとす、蓋し敵は此の際地形の爲め
兵力の分離を強制せらるゝを以てなり又高地に於ても敵巧に行動するにあら
ずんば等しく兵力の分離を強制せらるるに至るべし。



又更に之を廣く解すれば敵防禦陣地の占領未だ成らず據點未だ成立せざるが
如きの時我れ神速に攻撃すれば成功速なるが如きも亦敵の地形未得の時なれ
ばなり。

■太公望曰く奔走するを撃つ可し。
奔走可撃。

是れ蓋し敵の多忙繁劇なるの時にして未だ整然たる戦闘準備に就かざるの時

なるが故に我れ之に乗ずれば成功の公算大なるを以てなり思ふに我軍を前面に扣へ倉皇奔走するが如きは必ずや其の裡面に不利の情勢の潜在するものにして敵は此の境地より離脱せんが爲め斯く奔走するものなるべければなり。一説に曰く奔走は退走なり従て退避する敵を打つべしと、然らば則ち追撃の利を言ふものなり歩兵操典に曰く凡そ戦勝後に於ける一般の状態は動もすれば現況に眩惑して半途の成功に甘んじ徒らに果敢なる追撃を躊躇し功を一簣に缺くに至ることあり故に各級指揮官は敵兵退走せば直に猛烈なる追撃を始め之を窮迫し敵を殲滅して戦勝の効果を完ふすることを勉むべしと、今古其の軌を一にするものと言ふべし。

■太公望曰く戒めざる撃つ可し。

不戒可撃。

警◎戒◎不◎分◎な◎る◎時◎は◎敵◎の◎我◎に◎備◎ふ◎こ◎と◎不◎分◎な◎る◎時◎な◎り◎警◎備◎不◎分◎な◎れ◎ば◎我◎に◎勝◎算◎あ◎り◎従◎て◎攻◎撃◎の◎時◎機◎な◎る◎こ◎と◎今◎古◎變◎る◎こ◎と◎な◎し◎蓋◎し◎敵◎を◎不◎意◎に◎撃◎つ◎は◎攻◎撃◎成◎功◎の◎要◎訣◎な◎る◎を◎以◎て◎な◎り◎。

此の故に我が動靜を秘し敵に警戒を怠らしむるは我が目的を達するに於て極めて必要なりとす。

■太公望曰く疲勞するを撃つ可し。

疲勞可撃。

軍隊疲勞困憊すれば行動十分ならず精神又精明を缺き易し、行動十分ならず精神精明を缺けば活潑なる行動、斷乎たる措置を執り難し此の故に佚を以て勞を撃つは勝利を得るの途たりしこと古今變ることなし。

■太公望曰く將士卒を離るゝ撃つべし。

將離士卒可撃。

軍隊の活動は軍紀の振張するによりて望むべし將の威令行はれず士卒信附せずんば軍紀何によりて振張すべき即ち將と士卒と離反すれば軍紀紊亂し軍隊烏合の衆となる従て無爲爲能となるべく、活力又滅亡すべし斯の如き軍隊は之を撃滅すること極めて容易なりとす。

■太公望曰く長路を渉る撃つ可し。

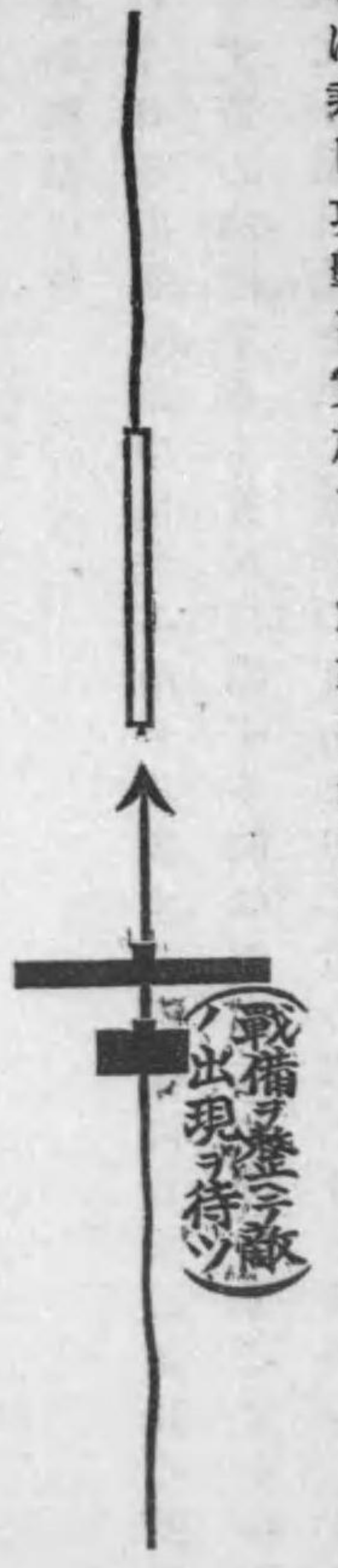
渉長路可撃。
此の時に於ては敵軍縦長の隊形に在り首尾相應する能はざるが故に戦闘場裡に其の全力を使用し得ざるを以てなり換言すれば我れ敵を各個に撃破し得るの好機なればなり。



之を現今の戦術に稽ふるに敵が優勢なる兵力を同時に使用し得ざるの時機を撃つものにして遭遇戦に於ける我れ先づ展開し尙ほ行軍縦隊にある敵を攻撃するが如し。

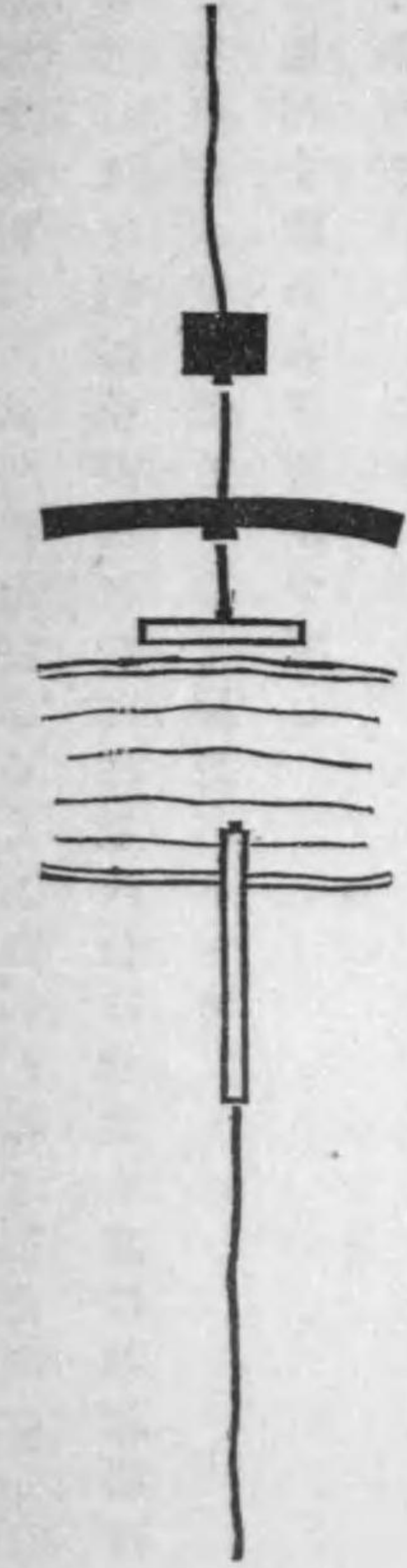


或は我れ早く戦場に到着して戦備を整へ敵の先頭出現するも全隊猶ほ展開せざるに乘じ攻撃を実施するが如き是れなり。



■太公望曰く水を濟る撃つ可し。
濟水可撃。

是れ所謂敵の半渡を打つ河川防禦の要訣にして敵の兵力を分離し之を各個に撃破するを得るの時なるを以てなり。



斯の如き時機は敵兵優勢を持するも其の我と戦闘を交ゆるものは我より劣勢なるものなり従て全兵力に於ては我れ彼に劣るも其の戦闘場裡の兵數に至つては我れ却て彼に優るを以て勝算ありとす。

■太公望曰く暇あらざる撃つ可し。
不暇可撃。

敵の士卒精神並に體力に於て忙殺せらるゝの時に當りては我が攻撃に對應するの餘裕なきを以て其の施設準備十分ならず其の活動又不完全なるべきを以て我に勝算あり。

■太公望曰く阻難狹路撃つ可し。

阻難狹路可撃。

是れ今日の所謂隘路中に在る敵を攻撃する場合にして敵は其の動作行止自由ならず苦心焦慮するも首尾相應ずる能はず大兵を持して之を用ゆる能はず是を以てか我は衆と俱に動作の自由を以て敵の寡と勞と動作の不自由とを撃ち得る時にして勝利の公算あるの時なりとす。



斯の如きの時機は敵之を冒すことあり我れ之を冒さしむることあり我れ之を冒さしむるものは我が河川の後退配備、高地の後退配備等なり其の何れたるを問はず其の本旨は等しく敵の兵力分離するの時に乗じ之を撃たんとするにありとす。隘路は此の不利なる兵力分離を餘儀なからしむるものなり是れ今日と雖も敵の隘路中に在るに乘じ攻撃するを有利とする所以なり。

■太公望曰く行を亂る撃つ可し。

亂行可撃。

節度亂れ統帥行はれず秩序連繫を缺くものは其の戦闘力微弱なり故に攻撃して勝算あるなり。

■太公望曰く心怖る撃つ可し。
心怖可撃。

恐怖は意志の不統一を來し疑惑迷誤を生じ果斷敢決する能はず從て銳氣銳鋒を避けんとし戰鬪に專一なる能はず是れ我が統一銳利なる精神を以て攻撃すれば成功の公算大なる時なりとす。

■吳起曰く凡そ敵を料りとはずして之と戦ふもの八あり

一に曰く大寒疾風に早く興き氷凍せる水を渡り艱難を敢てするもの、

疾風大寒。早興寤遷。剖氷濟水。不憚艱難。

二に曰く盛夏炎熱に早く興き休息せずして行軍し饑渴を冒して強行するもの、

の盛夏炎熱。早興無間行驅。饑渴務於馭遠。

三に曰く滯留久しくして糧食無く人民怨怒し天變地異數々起り制禦し得ざるもの、

師既淹久。糧食無有。百姓怨怒。妖祥數起。上不能正。

四に曰く軍資竭干糧秣寡に他に得る違なきもの、

軍資既竭。薪芻既寡。天多蔭雨。欲掠奪所。

五に曰く歩兵多からず地形不利人馬疾疫多く救援至らざるもの、

徒衆不變。水地不利。人馬疾疫。四鄰不至。

六に曰く長距離を行軍して日暮に會し軍隊疲勞し未だ食せずして警戒を怠つて息ふもの、

道遠日暮。士衆勞懼。倦而未食。解軍而息。

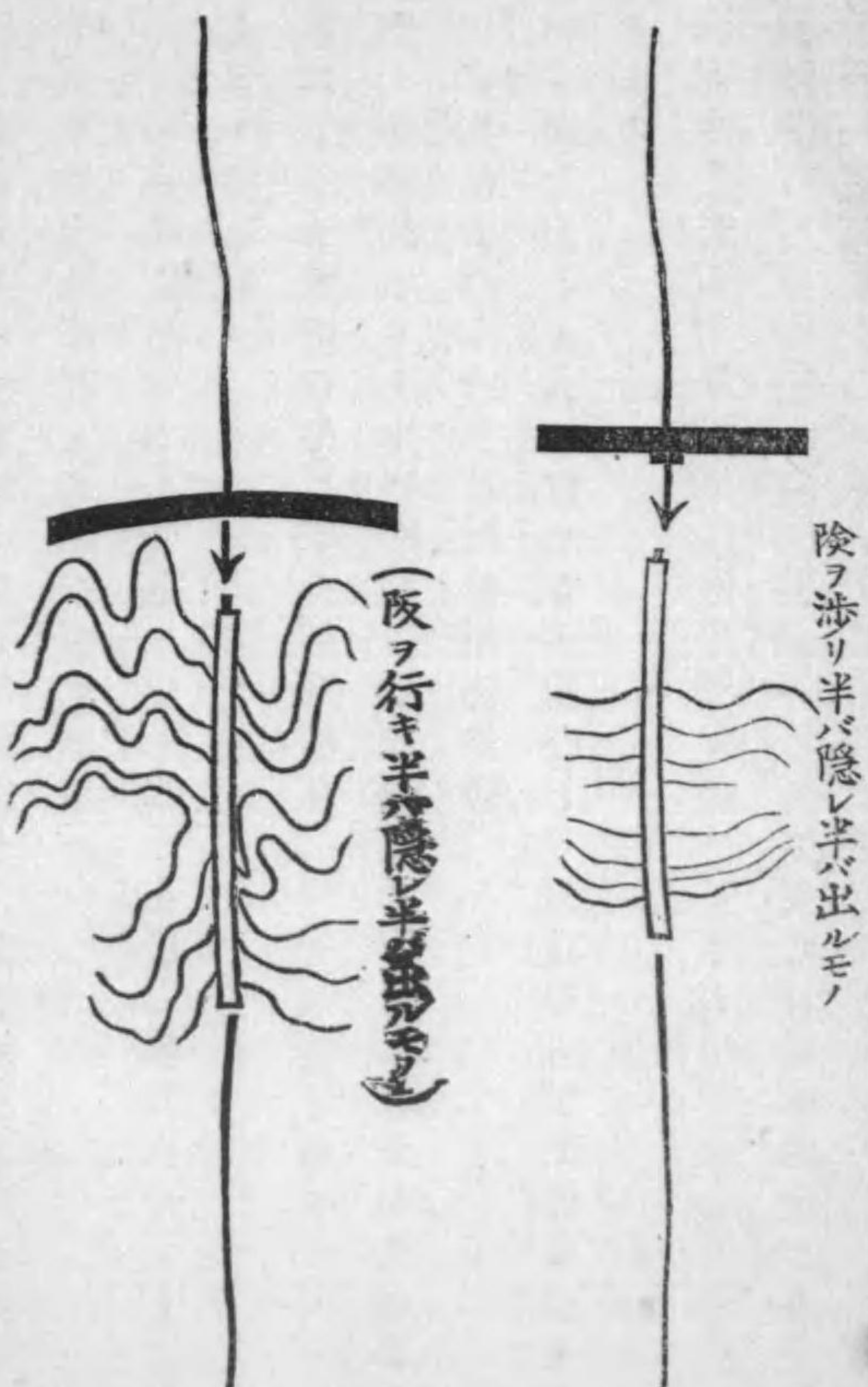
七に曰く將威嚴なく士卒堅確ならず軍隊數々驚擾し而かも孤立なるもの、

將薄吏輕。士卒不回。三軍數驚。師徒無助。

八に曰く陣を布きて尙ほ定まらず宿營して尙ほ畢らず障礙に據りて軍隊分離せるもの、

陣而未定。舍而未畢。行阪涉險。半隱半出。

行阪涉險にて半ば隠れ半ば出ずるものは蓋し首尾相應援し全力を以て戦闘し得ざるもの所謂隘路内若くは河川の半渡にあるものなり。



第四節 寡を以て衆を撃つの要訣

■太公望曰く敵卒然として去り其の兵力を集結せずして又來るものゝ如きは蓋し前後相次がさるを以て行陣亂れあるべし斯の如き敵に對しては急に兵を出して之を撃つべし少を以て衆を撃つも勝利を得べきなり。

太公曰敵入卒去不遠未定而復反者彼用其士卒大疾也。大疾則前後不相

次則行陣必亂。如此者急出兵擊之。以少擊衆則必敗矣。

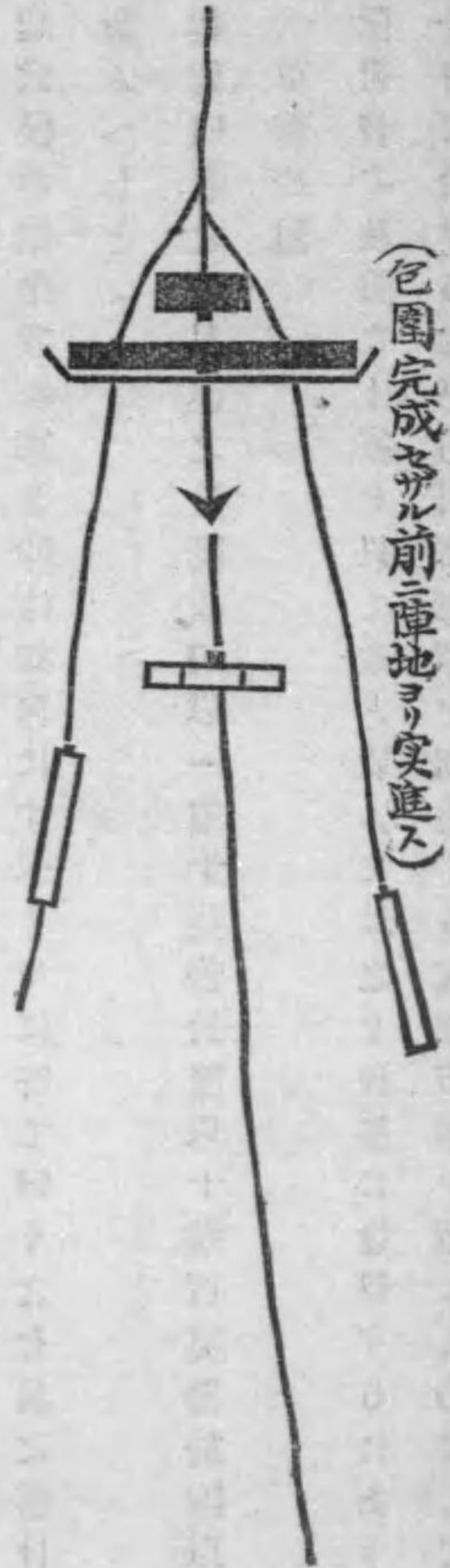
是れ蓋し敵の兵力分離に乗じ之を各個に擊破するものにして實に寡を以て衆を撃つの要訣にして戰勝を得るの第一義なり。

之を現今の戰略戰術に見るに其の精神は蓋し敵の全力の集結せざるの時機を言ふものにして之を大にしては戰略集中に於ける我れ先制を占めて敵の未だ集中を終らざるに乗ずるが如き。



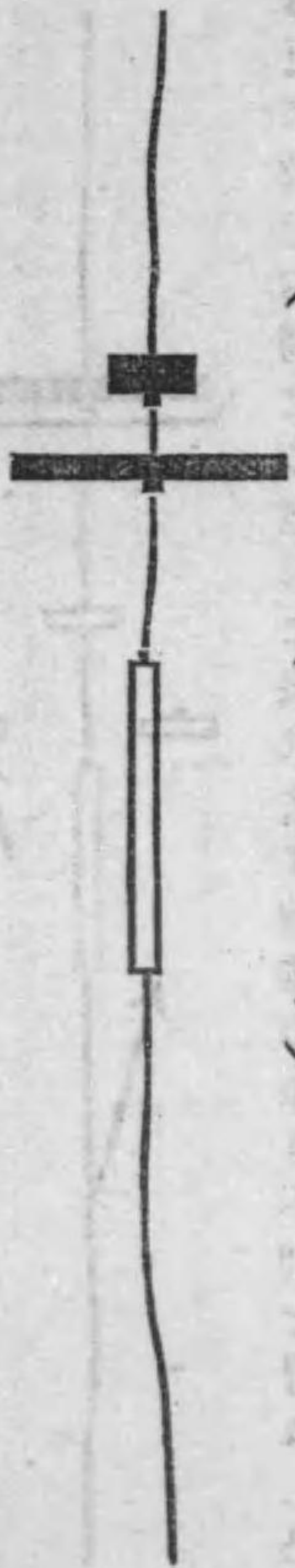
或は我が内線作戦によりて敵の先づ出現するものを撃つが如き。
 (内線作戦によりて敵の先づ出現したるものを撃破す。)

之を小にしては防禦陣地より突出し敵の包圍完成せざるに乗ずるが如き。



或は我れ速に展開して敵の展開終らざるに乗ずるが如き。

(我先展開シテ展開マカル敵突進ス)



或は我れ先づ陣地を占領し敵の出現して攻撃準備未だ整はざるの時機に乗ずるが如き。

(敵の攻撃準備整はざるの時機に乗ず)



或は殊更に敵を不利なる地形に陥れ之に前述の如き不利を冒さしめ以て之に乗ずる河川高地の後退配備の如き皆な是れなり。

■吳起武侯の敵衆我れ寡き時は如何にすべきやに答て曰く之を易に避け之を隘に邀ふべしと。

起對曰。避之於易。邀之於隘。故曰以一擊十。莫善於隘。以十擊百。莫善於險。以十擊萬。莫善於阻。

險隘阻皆な狹隘なり寡を以て衆と戦ふには之を狹隘に邀撃するにありとは蓋し今日に於ける隘路河川高地等を利用する攻撃防禦を謂ふものにして敵の衆

兵を衆兵として活動せしめず之を分離せしめて各個に撃破するを目的とするものなり。



其の邀撃を述ぶる所誠に味ふべきものなり。

■太公望曰く少を以て衆を撃つには必ず日暮を以て伏兵を深草に設け之を隘路に要するにあり。

太公曰以少擊衆者必以日之暮伏深草要之隘路。

是れ蓋し寡を以て衆を撃つに適當する三要素を併用せるものなり。日暮は我れ寡兵を集結して敵を詐騙し鋭く一點を撃つに便なり。

伏兵は敵に對應の手段を取るの暇あらしめずして之を擊破するを適當なる本意とす。隘路は敵の衆兵を用ゆる能はざらしむるものなり。是を現今の戰術に見るも彼の夜戰の如きは火器を以て勝敗を決するに非ずし却て敵の一點に向つて密集せる軍隊を使用し白兵を以て決戰するが故にて其の勝敗は全兵力の優勢にあらずして却て此の局部戰鬪の如何にあり而かも此の局部たる大兵ありと雖も使用し得ざるが故に我は克く全兵力に於て寡少なりと雖も此の局部に使用する兵力の優勢使用法の適良等によりて勝利を得るものとす從て現今と雖も寡を以て衆を撃つが爲め夜戰を行ふ事ある所以なり。伏兵は突然敵の不意に出て我に應ずる暇なきに乘じて成功を收むるにあり此の際敵は精神の混惑を來し其の措置を誤り或は遅延し其の施設の不備を來すべし從て其の成功は瞬間に收めざるべからず蓋し伏兵の效は實際の損害影響を擴大せしむるにあり故に精神的打撃大なれば其の實質的損害少なるも其の全效果偉大なることあり殊に突然の出現は我が損害を減少せしむべく且つ我

が寡少の兵力は伏兵實施に便なるを以て現今と雖も寡兵を以て衆兵を打つに用ひらるゝものとす。隘路内に在る敵の不利なる形勢なる事は前來數々述べたるを以て茲には之を略すも各個擊破を行ふに有利なる場合の一たる事は現今と雖も毫も異なる事なし況んや前三者を併用するをや。

第五節 牽制

孫子曰く遠くして戰を挑むものは人の進むを欲するものなり。蓋し是れ決戰を欲せざるも敵を誘致せんと欲するものにして所謂現今の牽制是れなり、牽制の本性は決戰を欲せざるも敵を誘致或は繫留するが爲め不着不離的戰鬪を行ふものなり。

現今牽制の目的を達するが爲め眞面目の戰鬪を餘義なくせらるゝこと多しと雖も是れ決して好ましき所にあらず、不着不離戰鬪を以て目的を達し得れば幸

之に過ぎざるなり。

第六節 防禦

孫武曰く防禦の要領は敵の攻撃方向を判断して之に備ふるに在り若し此の判断なくして各方面とも平等に配備するときは兵力分散して到る所皆な弱點となるの不利あり此の故に攻者に在りては成るべく敵をして此の不利に陥らしむることを計るを要す。

孫子虚實篇曰。吾所與戰之地不可知。不可知則敵所備者多。敵所備者多則吾所與戰者寡矣。故備前則後寡。備後則前寡。備左則右寡。備右則左寡。無所不備則無所不寡。寡者備人者也。衆者使人備己者也。

凡て防禦に在つては敵情就中其の企圖を速に察知すること極めて必要なり。陣地は到所同程度に守備するを要せず却て其の地形地物を利用し要點の兵力を強大にし其の他の地點に於ては之を節約せざるべからず。到所平等に配備す

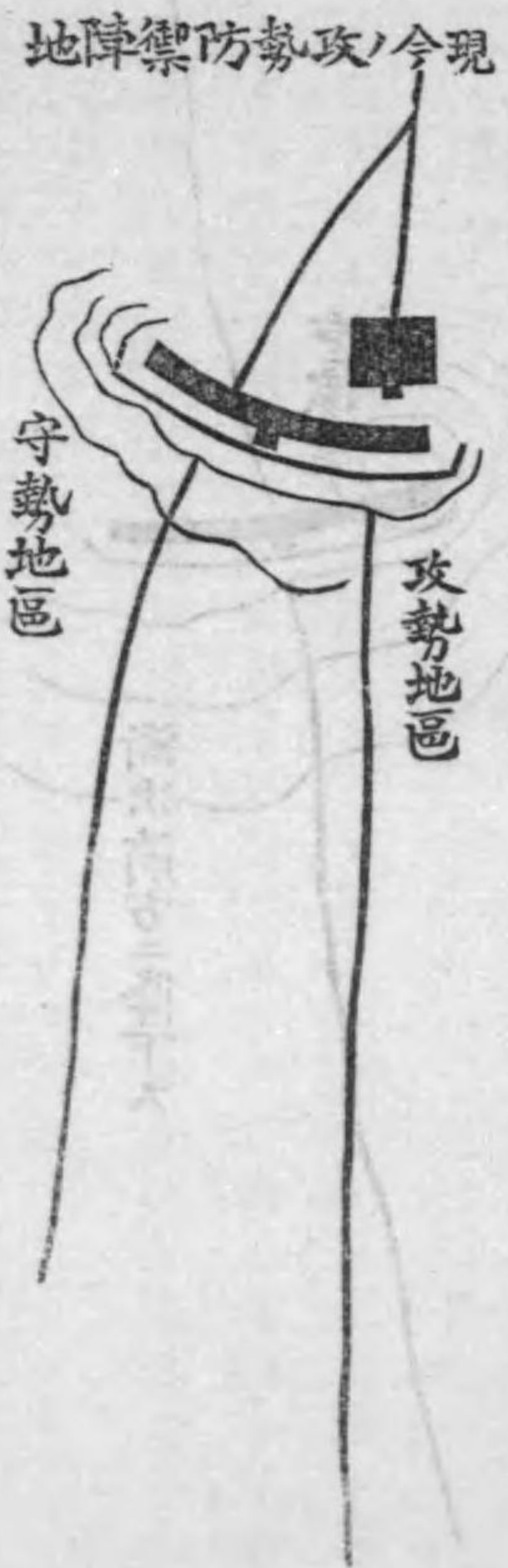
る時は到る所薄弱となり優勢なる兵力を要點に使用して我を攻撃する敵の爲め遂に壓倒せらるゝに至るべし。

孫子曰く平陸に於ては高地を據點とし敵方に降下する行動自由なる地に陣す可し(死は低地、生は高)
孫子曰。平陸處易。右背高。前死。後生。



是れ蓄し平地に於て敵と決戦を行はんとするに當り防禦陣地占領の要領にし

て右に據點を占めて守勢地帯となし其の左翼を攻勢地帯とするものにして現
今に於ける攻勢防禦陣地の占領要領と異なる所なし。



第七節 陣地占領要訣

■太公望曰く敵地に入るや地形を察し便利を求めて山林險阻水泉林木に依りて
 布陳し關塞橋梁を守備し又城邑丘墓地形の利を知るべし。
 太公曰凡深入敵人之境必察地之形勢務求便利依山險阻水泉林木而爲之固

謹守關梁又知城邑丘墓地形之利

陣地は其の目的に應じて之を占領するも其の本性地形の援助を以て兵力の不
 足を補ふにあるが故に第一に着眼すべきは地形の利用なり然れども陣地の各
 部は悉く所望の價値を有すること稀れにして又各部を平等に守備するの必要
 なじ却て要點の兵力を大にするを要す之が爲め地區地物を利用し支據點とな
 し以て一には陣地の鎖鑰となし一には兵力の節約を計らざるべからず。
 陣地は兵力に適合せざるべからず而して高地村落森林等を利用するを可とす
 然れども之が爲め勢と移轉を妨ぐるに至るべからず(步兵操典)。
 陣地の守兵は敵の近接に従ひ益々沈着して火器の效力を十分に發揚し以て敵
 を殲滅することを勉むべし(步兵操典)。

第四章 局地戰

第四章 局地戰 第一節 河川の戰闘

第一節 河川の戦闘

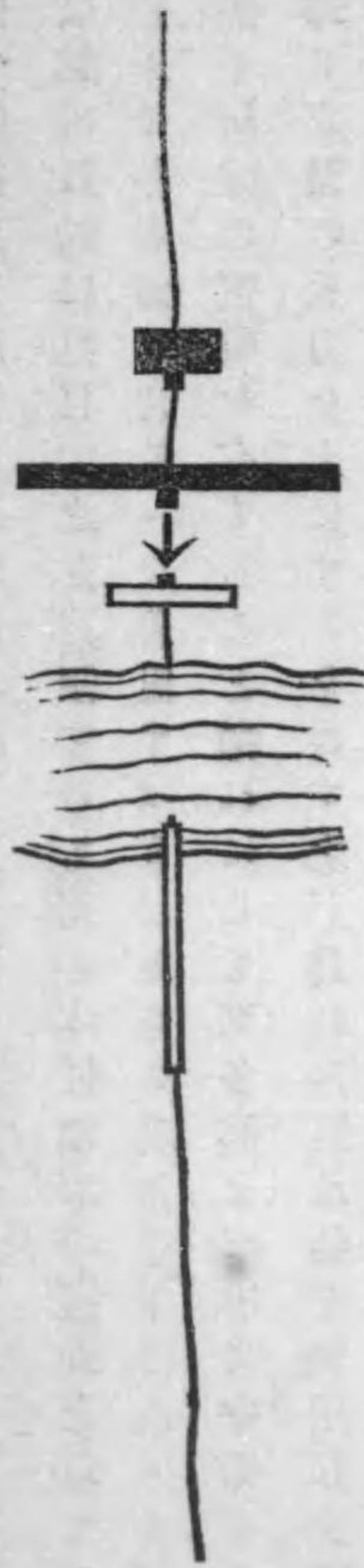
其一 河川の防禦

孫武曰く河線防禦の要領は敵の半済に乗じて攻勢に轉ずるに在り故に河岸に接して配備するは此の目的に合せざるものとす。

孫子行軍篇曰く客絶水而來勿迎之於水内令半済而撃之利欲戦者無附水而迎客

吳起曰く敵若し水を渡らば半済に之に薄れ

吳起曰く敵若絶水半済而薄之。



河川防禦の要訣は敵の半済に乗じ攻勢に轉ずるに在り之が爲め豫想する各渡河點に若干の警戒部隊を配置し主力は之を集結して敵兵縱令何れの方向より來るも直に之に應じ得べき地に位置せしむべし(歩兵操典)

孫子曰く敵をして川を渡らしめて戦はんと欲せば水に接して之を迎ふるなか

れ。

孫子曰く欲戦者無附於水而迎客。



河岸に接して配備する時は敵此の點より渡るを欲せずして他の地點より渡河せんとするか若くは河を挾んで戦ふに至るべし。此の故に我岸に渡らせて後打つ能はず我岸に渡らせて後撃たんと欲せば先づ

敵を渡らすこと必要なり、敵を渡らせんと欲せば我は岸を離れて陣地を占領せざるべからず。

是れ現今の戦術に於て持久の目的を以ては河岸に接して占領し、決戦の目的を以ては河岸を離れて後退配備をなすと同義なり。

其二 河川ノ攻撃

孫子曰く水を渡らば必ず水より遠ざかるべし。

孫子曰く絶水必遠水。



蓋し水に近ければ後に渡る部隊の集合する地積なきのみならず敵襲あるに當つては其の影響直に渡河中の後続軍隊に及ぶの虞れあり。

是れ現今に於ける渡河援護部隊が後続部隊の集合、展開の地積を得有し且つ敵弾をして渡河中にある軍隊に及ばざらしむる爲め適當の距離を取ると合するものなり。

又全軍河を渡りて布陣するに際しても後方に餘地を存し我が動作の自由を保持し且つ萬一の場合に備ふるを要すること古今異なる所なし。

第二節 山地戦

其一 山地の防禦

太公望曰く我れ山上に陣すれば敵に接止を餘儀なくせられ我れ山下に陣すれば敵に囚繫せらるゝに至る此の故に山地に在りては左右相援け前後相應ずるの配備を取り動作の自由を保持し敵の爲め我が欲する行動を抑制せられざるを要す之が爲め山陽に陣には山陰に備へ山陰に陣せば山陽に備へ、山の左に陣せば其の右に備へ、山の右に陣せば其の左に備へ且つ通路谷地を守備し要すれば之を阻絶し且つ敵に我が情況を知らざらしむべし、我は連終通信を整備し敵

若し攻撃し來らば神速に戦ふべし。

太公曰。凡三軍處山之高則爲敵所棲。處山之下則爲敵所囚。既以被山而處則爲烏雲之陣。烏雲之陣陰陽皆備。或屯其陰。或屯其陽。處山之陽備山之陰。處山之陰備山之陽。處山之左備山之右。處山之右備山之左。敵所能陵者兵備其表。衝道通谷。絕以武車。高置旌。損謹勅三軍。無使敵人知吾之情。是謂山城。行列已定。士卒已陣。法令已行。奇正已設。各置衝陣於山之表。便所處及分車騎。爲烏雲之陣。三軍疾戰。敵人雖衆。其將可擒也。

山地は一般に展開區域狹く交通不便にして運動容易ならず大部隊の指揮を困難ならしむ。

山地の防禦に於ては敵方に通ずる諸道路を堅固に守備するを要す而して陣地は一般に堅固なるが故に動もすれば陣地に固着し易く又敵の迂回に對せんが爲め正面過度に擴張するに至ることあり殊に運動の困難と指揮の不便とに依り攻勢に轉ずること容易ならず(士官學校教程)。

山地に在りては攻防共に敵を瞰制すべき位置を占むべし又交通設備を完全な

らしむることを勉むべし(歩兵操典)。

山地の防禦に於ては敵方に通ずる諸道路を堅固に守備するを要す(歩兵操典)。山地の戦闘に於ては防者は緊要なる縁部を占領し山頂より谷及斜面を瞰射し得る如く軍隊を配備す(歩兵操典)。

其二 山地の攻撃

■孫子曰く山地に於ては制高の地點を占領すべく、隆きに戦はゞ登ること勿れ。

孫子曰。視生處高。戰隆無登。

蓋し陰濕靄氣の害を避け瞰制の效によりて精神並に物質上の利を占めんとするものにして山地占領の要義なり。敵若し高所を占領するの際には我れ之に對し低きより向ふは不利なり、他の山陵山頂等より之に迫るか或は迂回するを利とす是れ山地に據る敵を攻撃するの要領なり。

■孫子曰く山險にありては我れ先づ其の高陽地點を占領して敵を待つべく敵先づ之を占領せば暴りに之を攻撃する勿れ。



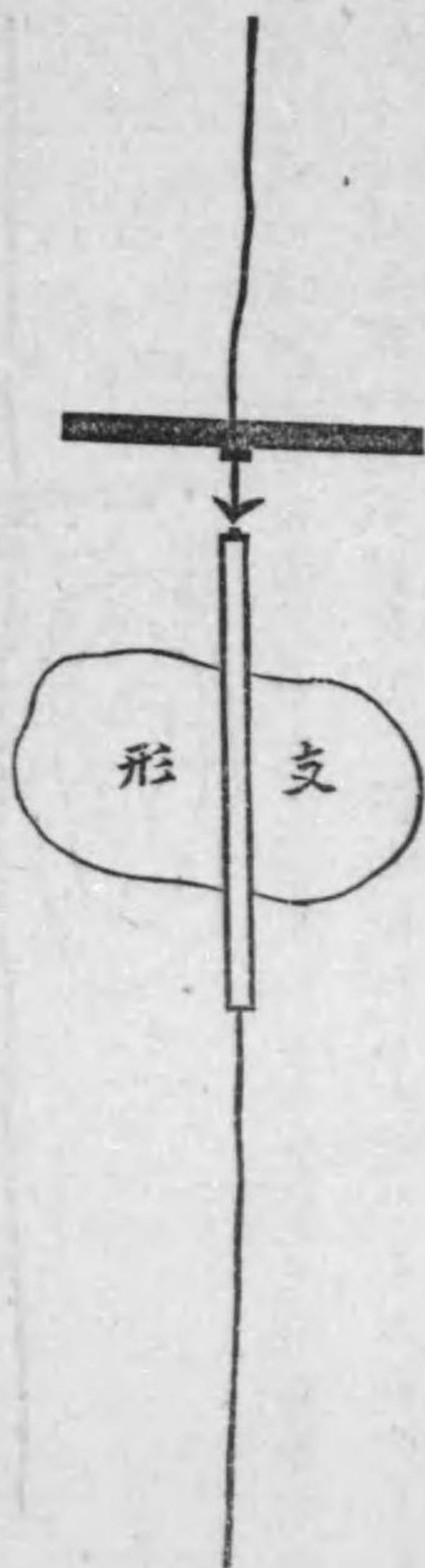
孫子曰險形者我先居之。必居高陽以待敵。若敵先居之引而去之勿從。
蓋し是れ山地に於ける陣地占領の要領にして我は常に制高地を占むるの有利なること前陳の如し然れども若し敵之を占領すれば暴に之を攻むることなく他の策を講ずるを要す例へば敵の守備なき地點若くは遠く之を迂回するが如し。
是れ現今の戦術に於ても勸告する所たるなり。

第三節 隘路 戰

其一 隘路の防禦

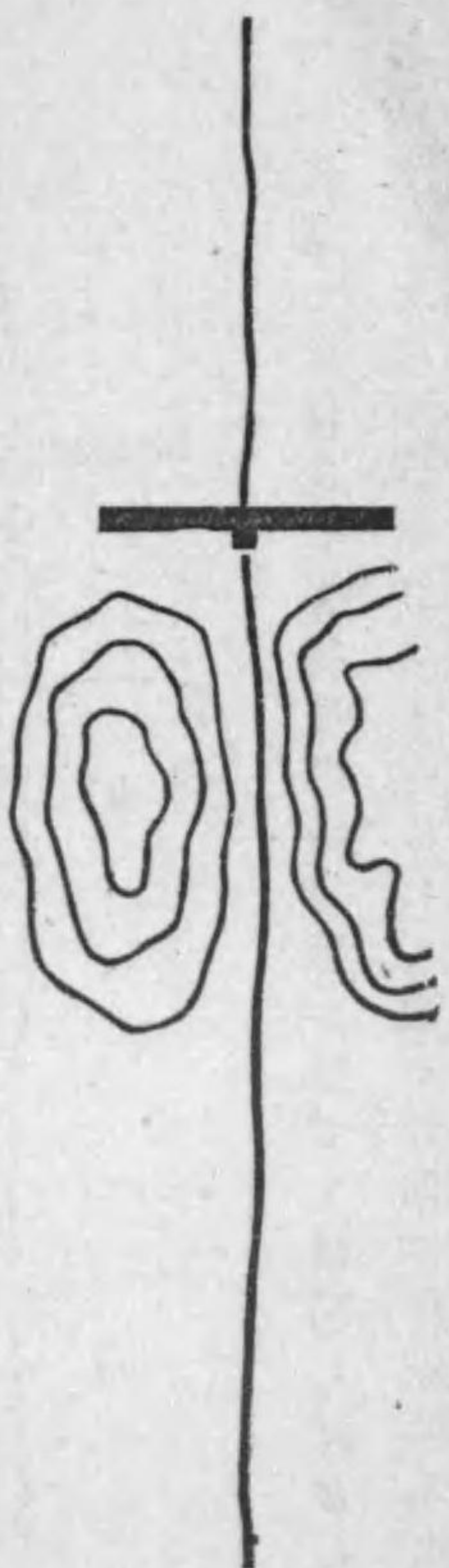
孫子曰く我れ出ずるも敵出づるも不利なる地形に於ては寧ろ後退して敵を半ば出さしめて之を打つべし。

孫子曰。我出而不利。彼出而不利。曰支。支形者敵雖我利我無出也引而去之令敵半出而擊之利。



是れ隘路後退の配備にして我は隘路(支形)を捨て、後退し敵をして之を領有せしめ其の半ば進出するを打つものにして敵を各個に撃破せんとするものなり。
孫子曰く隘路には我れ先づ其の口を満して布陣し敵の來るを待ちて之を撃て。

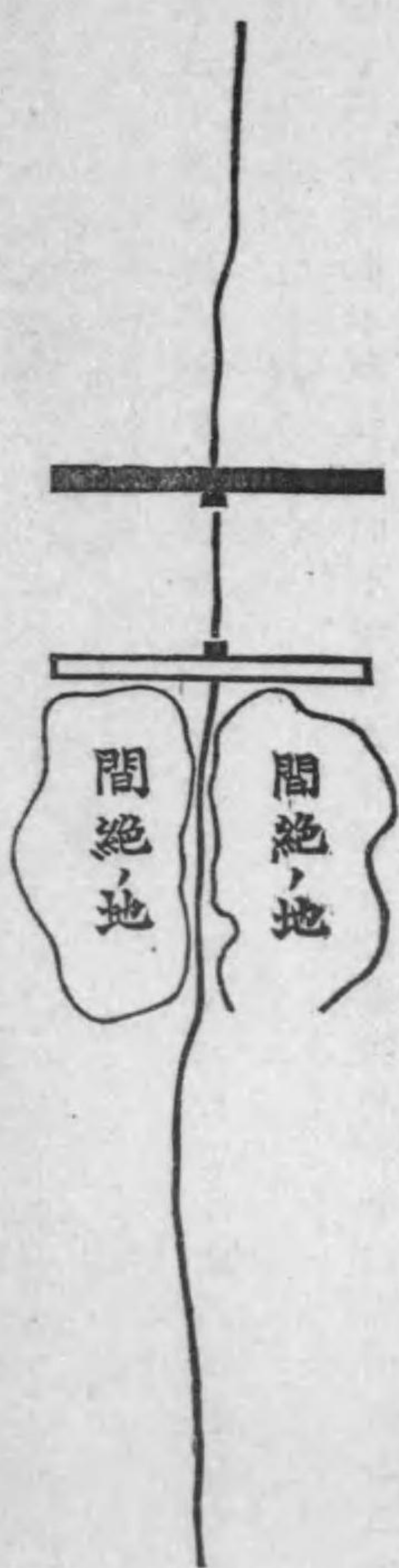
孫子曰。隘形者我先居之。必盈之以待敵。



是れ蓋し敵の進出するに乘じ打たんとするものにして隘路後退の配備なり。

孫子曰く我は絶間の地を前にして陣し敵は之を後にして陣せしむべし。

孫子曰。天井。天牢。天羅。天陷。天隙。必函去之勿近也。吾遠之敵近之吾迎之。敵背之。

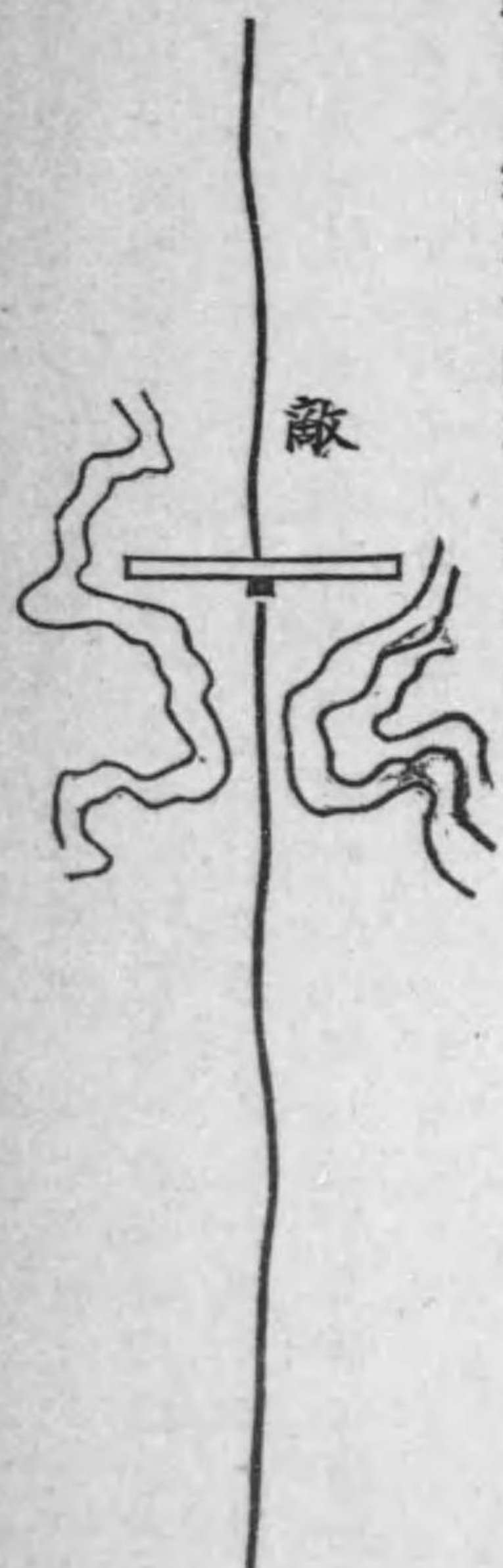


蓋し是れ我は動作の自由を保持し敵をして困難なる地形に陥らしめんとするものにして彼の隘路戦の要義に合するものなり。



其二 隘路の攻撃

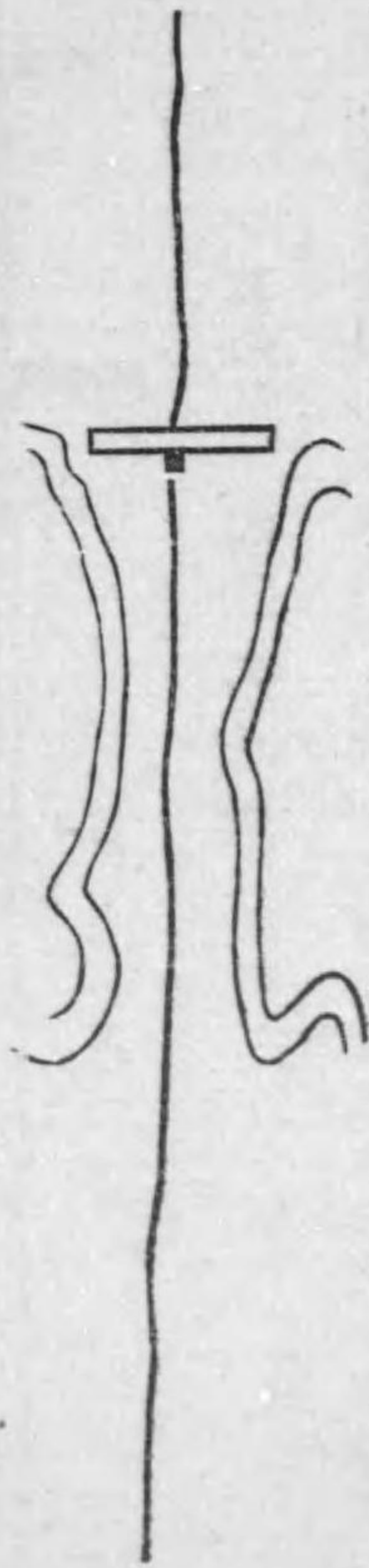
孫子曰く若し敵先きに隘路口に盈ちて布陣せば暴に之を攻撃すべからず若し隘路口を塞がずば之を攻撃せよ。



孫子曰。若敵先居之盈而勿從不盈而從之。

蓋し是れ敵隘路口を塞ぐ如く後退して配備すれば、漫然之を攻撃すべからず、隘路後退の敵は我が半ば出ずるに乘じ攻撃するを企圖するを以て漫然之に對すれば大敗を招くが故なり現今と雖も此の如し宜しく他に迂回するか或は慎重に誠め準備を整へて隘路を進出せざるべからず。

若し敵隘路口に盈たずして布陣すれば我も亦之と同等の兵力を以て對應し得



るが故に所謂兩鼠穴中に闘ふに勢ひ相同じ唯た勇なるものよく勝を制するものなれば宜しく猛烈に攻撃すべきなり。

隘路内に布陣する敵を攻撃するの要領は現今と雖も亦之に出てず。

■太公望曰く隘路戦の要は武衝の車を前にし大櫓を衝とし左右中央相呼應して進撃し馳突果積勝利を得ざれば止まざるにあり。

公太曰。凡險戦之法以武衝爲前。大櫓爲衝。材士強努翼吾左右。三千人爲屯。必置衝陣。便兵所處左軍以左。右軍以右。中軍以中。並攻而前。已戰者還歸屯所。更戰息必勝乃已。

直接隘路を通過して行ふ攻撃は夜暗或は濃霧等に乗じ急襲するを可とす若し此の方法に依るを得ざる時は敵の下に強行通過を實行せざるべからず之が爲め直接隘路を守備する敵に對しては隘路の近傍に於て蔭蔽して隊列を整へ歩砲兵の掩護射撃に依り距離間隔を閉收せる縦隊を以て一舉に突進すべし、直接配備の敵に對しては飽く迄て突撃を斷行するを要す。

其三 隘路内の遭遇戦

■吳起曰く若し高山深谷に卒然と敵と遭遇せば先づ先制の利を占め之に乗じ審に其の治亂を察し之を撃つを疑ふこと勿れ。

若高山深谷卒然相遇。必先鼓譟而乘之。進弓與努且射且虜。審察其活亂。則擊之勿疑。



蓋し我れ先づ先制の利を占めて突進攻撃し彼の部署を混亂せしめ其の亂れたるに乗じ益々之を攻むるの精神にして此の際に於ては敵も我も十分なる兵力を用ゆる能はざるが故に其の精神作用に於て優勢を占め戦闘動作に於ては先づ戦闘するものを壓迫し撃破するを要す。是れ實に隘路内に於ける戦闘の要領なり。

第四節 森林戰

■太公望曰く森林中に於て戦闘するに當つては兵力を集結して突撃に便し要す

れば草木を斬除して我が行動に便し且つ我が情況を秘匿すべし。森林疎ならば併せて騎兵を使用し森林密ならば敵方は勿論左右並に後方をも警戒し既に敵と遭遇せば神速に突進すべし。

太公曰。使吾三軍分爲衝陣。便兵所處。弓弩爲表。戟楯爲裏。斬除草木。極廣吾道。以便戰帥。高置旌旗。謹勅三軍無使敵人知吾之情。是謂林戰。林戰之法。率吾矛戟相與爲伍。林間木疎以騎爲輔。戰車居前。見便則戰。不見便則止。林多險阻。必置衝陣以備前後。三軍疾戰。敵人誰衆其將可走。更戰更息。各接其部。是謂林戰之紀。

森林中の戦闘は通視運動及射撃の不便なること。攻防兩者共に同一なり。森林内に於ては常に兵力を集結し其の離散を防ぎ敵の接近するや近距離に於て猛射の後直に突撃に移るか或は直に突撃を斷行すべし。

森林内は我が騎兵の活動を制限せらるべしと雖も疎林内に於ては不意に林外。林空或は道路に現出して敵を襲ひ又は速に隱匿するを得ることあるものとす。

第五章 騎兵戰の要訣

太公望曰く騎兵戦は左の場合に於て勝利を得べし。

- 一 敵の隊形未だ定まらず前後續かざる時其の前騎を陥れ其の左右を撃つとき。
- 二 敵の隊形整齊堅固なるも我が神出鬼没の行動を以て變幻出沒し彼を脅すとき。
- 三 敵の隊形整はざる時不意に其の前後を襲ひ兩翼を襲ふとき。
- 四 敵の宿營せんとする時其の兩旁より包み且つ其の退却には迂回して之を急襲するとき。
- 五 敵險阻に依托することなく長驅するに當り其の糧道を絶つとき。
- 六 地形平坦敵に依托物なく我が車騎兩兵を用ひ得るとき以下略す。

太公望曰く騎兵戦は左の如き場合に於て不利なり。

- 一 我れ敵陣を破る能はず彼れ却て伴走り車騎を以て其の後を撃つとき。
- 二 我れ險を踰へて長驅し敵の伏兵の左右並に後方より起りたるとき。

- 三 行き返る能はず入つて出づる能はざるの地形に陥りしとき
- 四 我れ隘路内に在りて其の出口に遠きとき。
- 五 大澗深谷森林中。
- 六 汗下沮澤進退漸汝なるとき。

太公曰敵始至行陣未定前後不屬。陷其前騎擊其左右敵人必走。

敵人行陣整齊堅固。士卒欲闘。吾騎翼而勿去。或馳而往。或馳而來。其疾如風。其暴如雷。白晝如昏。數更旌旗。變易衣服。其軍可克。

敵人行陣不固。士卒不闘。薄其前後。獵其左右。翼兩擊之。敵人必懼。

敵人暮欲歸舍。三軍恐駭。翼其兩旁。疾擊其後。薄其壘口。無使得入。敵人必敗。

敵人無險阻。保固。深入長驅。絶其糧道。敵人必饑。地平而易。四面見敵。車騎陷之。敵人必亂。

敵人奔走。士卒散亂。或翼其兩旁。或掩其前後。其將可擒。

太公曰。凡以騎陷敵而不能破陣。敵人佯走。以車騎以擊我後。此騎之敗地也。

追北踰險。長驅不止。敵人伏我兩旁。又絶我後。此騎之圍地也。

往而無以返。入而無以出。是陷於天井。頓於地穴。此騎之死地也。
 所從入者隘。所從出者遠。彼弱可以擊我強。彼寡可以擊我衆。此騎之沒地也。
 大澗深谷。翳叢林木。此騎之端地也。
 左右有
 汗下沮澤。進退漸沮。此騎之患地也。

第六章 對騎步兵戰

■太公望曰く。步兵と騎兵と戦ふに方りては。步兵は丘陵險阻に據り。長兵強弩を前に置き。短兵弱弩を後に置き。更々發し陣を堅くし。疾く且つ其の背面を備ふれば。敵騎優勢なりと雖も。之に對するを得べし。
 若し天然の地形。地物に據る能はずんば。拒馬。塹濠の類を設け。之に據るべく。我が車輻の類を推して。前み之を止めて。布陣し。材工強弩を以て。左右に備へ。疾く戦ふべし。

太公曰。步兵與車騎戰者。必依丘陵險阻。兵強弩居前。短兵弱弩居後。更發更止。敵之

車騎雖衆而至。堅陣疾戰。材工強弩以備我後。

太公望曰。令我士卒爲行馬。不蒺藜置牛馬隊伍。爲四武衝陣。望敵車騎將來。均置蒺藜。掘地匝後。廣深五尺。命籠人操行馬。進步闌車。以爲壘。推而前後立。而爲屯。材工強弩備我左右。然後令我三軍皆疾戰。而必解。

第七章 兵卒

■諸葛孔明曰く。兵卒節制あるときは。其の指揮官たとひ無能なるも。敵之を敗る。と能はず。之に反し。兵卒節制なきときは。其の指揮官たとひ有能なるも。之を以て敵に勝つこと能はざるなり。

唐太宗李衛公問對。太宗曰。諸葛亮言。有制之兵。無能之將。不可敗也。無制之兵。有能之將。不可勝也。

■吳起曰く。軍人の戰場に赴くや。前進して死するは。最大の名譽にして。又退却して生を全ふするは。最大の耻辱たること。心得ざるべからず。

吳子圖國篇曰。士以進死爲榮。退生爲辱矣。
 吳子論將篇曰。師出之日。有死之榮。無生之辱。
 吳起曰。死尸累々たる戰場に於て能く死を決して奮闘する者は却て生き苟くも生を冀ふて逡巡する者は却て死するものとす。
 吳子治兵篇曰。凡兵戰之場。止屍之地。必死則生。幸生則死。

七書之兵法と現今之戰術終

大正三年六月十日印刷
 大正三年六月十日發行

七書之兵法と現今之戰術與付
 全一册 金三十五錢
 郵税四錢



發行者 東京市赤坂區表町二丁目一番地 伊藤芳松
 著者 研究会
 印刷人 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 山下注連雄

◎發行所

電話新橋二六〇五番
 振替貯金口座二〇九八七番

東京市赤坂區表町二丁目一番地
 兵事雜誌社

●讀書界の福音急告!!!

研究會著●●●豫約募集!!! 豫約者は郵税を不要又月賦拂込不苦

改正陣中要務詳解 全拾冊

體裁判製本
製ノロリス金本
字入紙數各三百
五十餘頁ノ豫定
正價一冊金八十
五錢送料八錢

我が研究會著「大正野外要務詳解」全八巻は其發行以來未だ幾許ならざるに第三版を出し猶ほ需用と供給と相伴はざる盛況を呈し讀書界に偉大の歡迎と信憑とを受けたり是れ本社之光榮とし益々奮勵して國家の爲め敢て盡瘁せんとする所以なり。

然るに今や我が野外要務令は新に改正せられ不日其の發布を見んとす。

茲に於て我社は此新要務令に基く一大詳解の公表を研究會に依囑し其快諾を得たり、研究會の地位と聲望とは本社が喋々するを要せず晩近に於ける戰術書の主要にして眞價あるものは殆んど同會によりて公表せらるゝに見て既に諸賢の熟知承認せ

らるゝ所なるを信ず。

「改正陣中要務詳解」も亦實に其價值と分量に於て古今獨歩なること敢て本社之贅辯を要せず即ち左に其特色を掲げて其實に負かざることを証せんとす。

- 一、頁數約四千頁、卷數十卷。
- 二、改正要點と理由とを附記し對照研究に便す。
- 三、文章明快、説明懇切、叙述詳細。
- 四、圖解表示に於て周到適切。
- 五、陸軍大學入學試験受験者の良友。
- 六、軍隊教育者指揮官の好侶伴。

本社此大冊を發行するに要務令發布後四ヶ月以内にて全部を完了せんことを期す是れ又本社の誇とする所にして世に斯の如く神速なる發行書類を見ざるなり請ふ刮目して其の世に出づるの日を待ち誇言ならざるを証せられんことを。

◎豫約申込所

東京市赤坂區表町
電話新橋二六〇五

兵事雜誌社

緊急豫約廣告

研究會 著

(豫約申込者ハ郵税ヲ要セズ)

新陣中 要務令對照研究全 舊野外

(附改正理由)

體裁 菊版
頁數 約五百頁
全一冊
金七十五錢
郵税金八錢

改正陣中要務令ハ將ニ公布セラレントス苟クモ職ヲ我陸軍ニ奉ズル者ハ之ガ研鑽討
究ニ腐心シ一刻ト雖モ人ニ後ルルヲ潔トセザルベシ此時ニ際シ平日軍
事界ノ開拓ヲ以テ自任スル 本社ニシテ敢テ奮勵努力シテ以テ大方諸賢ノ
益ヲ圖ラズシテ可ナランヤ爰ニ於テカ本社ハ既ニ諸賢ノ熟知セラルル斯界ノ權
威タル研究會ニ囑スルニ新舊要務令ノ對照研究ヲ以テシ
速ニ之ヲ公刊シテ諸賢ノ渴望ヲ醫センコトヲ以テシタルニ幸ニ其快諾ヲ

得タリ惟フニ研究會ノ地位ト其熱誠ナル 精勵ノ結果ハ必スヤ新要務令ノ發
布後週日ナラズシテ之ヲ諸賢ノ座右ニ呈供スルヲ得セシムベシ是レ本社ノ深
ク信スル所ニシテ諸賢モ亦本社從來ノ事業ニ依リ首肯セラル、所ナルベシ若シ夫レ本書ノ價值ノ如
キハ敢テ喋々ヲ要セス之ヲ同會ノ他ノ公刊書ニ徵シテ判知シ得ラルベシ殊ニ本
書ハ新舊要務令ヲ逐條漏サス収録シ之ヲ對照シ改
正ノ要點ヲ掲ゲ其ノ理由ヲ研究詳述シアルヲ以テ本書一本ヲ有
スレバ新要務令ヲ購求スルノ必要ナシ。
本社ハ豫メ其印刷速力ニ限リアリ忽チ品切トナランコトヲ虞レ諸賢ニ之ガ購讀豫約申込ノ一刻モ速
カナランコトヲ勸告スルモノナリ。

東京市赤坂區表町二丁目一番地

◎豫約申込所

電話新橋二六〇五番
振替貯金口座二〇九八七

兵事雜誌社

兵書界の革命的命的大好評書

◎兵書界の革命的新刊!!
 研究会著 ◎大好評を博し忽ち賣切れ第五版發行

戰略戰術詳解

體裁菊版頁數各册
 約三百頁前
 製本本製金文字入後
 全七册正價 郵稅金八錢

研究會の斯界に於ける地位は今更喋々陸軍大學出身者にして樞要なる職務に従事し
 するを要せずと雖も其會員の大多數は陸軍大學出身者にして樞要なる職務に従事し
 實施學校の要職にある者なることは既に讀者の熟知する所なりと信ず。又本社は幾に此
 を得たり。今「戰略戰術詳解」は研究會が我國に良一年有半の歲月を費
 初て完成したる未會の大某高等學府の教官の熱誠なる援助により産出せられた
 著なり。研究會員の奮勵と其冊數に見る目次に照すも我國戰術書界未會の大著
 するを要せざるべし。其冊數も其の紙數も其の目次に照すも我國戰術書界未會の大著
 に對比するも又以て誇りとなすに日本の戰術にして大和魂、武士道の
 國粹を立脚するに足らざるなり。上將帥より青年將校に至る迄苟も
 戰術を語るに足らざるなり。陸軍大學受験者と云はんや又管に青
 者は必ず之を其座右に備へざるべし。陸軍大學受験者と云はんや又管に青
 べからずと信ず豈何ぞ必ずしも陸軍大學受験者と云はんや。

◎發行所

電話 新橋二六〇五番
 振替貯金口座二〇九八七番

兵事雜誌社

軍隊教育界空前の大著!!! 再版發行

新教育令軍隊教育詳解

全二册 上下

體裁菊版頁數約
 三百頁宛
 製本本製金文字入
 一册金七十五錢宛
 小包料八錢宛

軍隊教育令は改正せられて茲に我が軍隊教育上に一新紀元を畫せり然れども
 軍隊教育令は一の成文なり之が教育實施者にして至當に之を解し其の精神を
 闡明して敢て戻ることなく其の指向する所に向つて努力するに非ずんば幾度
 之を改むると雖も我が軍隊教育は決して大なる進歩發展を見ざるなり。此の
 故に事に教育に従ふものは之か研究に腐心し其の精神を擴充して軍國の爲め
 に努力するに於て敢て遺漏なきを期せざるべからず。我が軍隊教育實驗會は
 夙に茲に感ずる所あり新軍隊教育令を研究し其の精
 神を闡明し其の意義を擴充して本社に其の公刊を許諾されたり。
 我が軍事界は今や戰術戰略書を得るに難からず軍隊教育に關するものに至り
 ては之を得るに苦む是れ本書の特に必要にして有益なる
 所以なり敢て江湖篤學篤業の士に一讀を勸む。

◎發行所

振替貯金東京二〇九八七番
 電話 新橋二六〇五番

兵事雜誌社

本書は發行早々大好評を博す

我陸軍教育之基準書!!

陸軍教育指針全

體裁ポケット形用字六號
文字、紙頁八百餘頁
製本草製本本文字入
全一冊 定價金八十錢
小包料八錢

教育の諸條規に通曉することは教育を完全ならしむる基礎なり然るに其必要なる條規は極めて多く到底之を諳熟する能はざるなり之を以てか成規を一括して座右に備へ必要に臨み之を繕き以て諳熟の困難に代へざるべからず是れ本社が特に教育に關する必要成規を網羅し之に内務其他分離すべからざる成規を加へて敢て鉛型に附したる所以なり坊間曲籠令に關する此種の冊子少しとなさず其教育に關するものに至つて則ち本書あるのみ江湖の諸賢希くは一本を其座右に備へ以て國家教育に遺漏なきを期せられんことを。

發行所

振替貯金東京二〇九八七番
電話新橋二六〇五番

兵事雜誌社

東京市赤坂區表町二丁目一番地

研究會著◎忽ち初版再版賣切第三版發行

戰術難問題の解決

全二冊

體裁菊判説明木板
百餘個入製本製
上等クロイスキ文
字入全上下二冊
各一冊金七十五錢
郵税八錢宛

陸軍大學ハ青年將校ノ空龍門ナリ苟モ其初一念ヲ貫徹セント欲スレバ必ズヤ其門ヲ叩カザルベカラズ然レドモ此事タル決シテ尋常一茶飯ノ談ニアラズ一度顛轉シテ起ツ能ハザランカ優勝劣敗ノ蹟ハ慘トシテ心神ヲ悼マシムルモノアリ是レ掬躬盡瘁其及バザルヲ虞レシムル所以ナリ然リ而シテ大學入學試験中其最モ困難ナルヲ再審トナシ再審中最モ困難ナルモノヲ戰術トナス本社嘗テ研究會員ニ請ヒ再審試験難問題ノ解決ヲ兵事雜誌ニ掲グルヤ江湖ノ士督責懲慙シテ其大成ヲ促スコト切ナルモノアリ、謂フニ其事ノ緊喫シテ其益スル所甚大ナルニ因ルベシ茲ニ於テカ本社ハ更ニ未ダ發表セザル難問題數十ヲ加ヘ詳ニ之ヲ研究シ時ニ再審試験問答ノ要領ニ擬シ以テ從來嘗テ見ザルノ懇切ト精細トヲ發揮セリ希クハ江湖篤學士ノ渴仰ヲ醫スルヲ努メタリ請フ一本ヲ備ヘテ人後ニ落チザル準備ヲ整ヘ其初一念ヲ貫徹センコトニ努力セラレヨ是レ本社私利ノ爲ニアラズシテ實ニ國家ノ爲切望ニ堪ヘザル所ナリトス

發行所

東京市赤坂區表町
電話新橋二六〇五番

兵事雜誌社

我國軍人の必讀すべき稀有の好戰術書

研究會 著 ◎好評噴々たる新刊著

優勢軍ニ對寡弱軍之戰術全

體裁菊版 說明木板
數十個 入製本本製
上等本 金七十五錢
全一冊 郵稅八錢

帝國ノ境遇未來ノ戰場ハ吾人亦之ヲ談ラジ然レトモ何レノ國ト戰ヒ何レノ土地ヲ戰場トナストモ吾人ハ常ニ寡少ナル兵力ヲ以テ優勢ナル軍隊ニ對セサルベカラズ若シ夫レ寡少軍ハ常ニ優勢軍ニ對シ消極的ニ作戦ヲナスベシト謂ハハ則チ止ム然レトモ斯レハ帝國ハ如何ニシテ其發展ヲ遂行シ得ヘキカト想フニ優勢軍ヲ以テ常勝軍寡少軍ヲ以テ優勢軍ニ對テ常勝軍トナルハ誠ニ難シ然ルニ我帝國ハ此ノ困難ヲ排除ニ通常一遍ノ戰術ヲ戰術トナルハ統帥ヲ以テ満足シ得サル所ナリ。研究會ハ茲ニ見ル所アリ地位アリ經歷アル某氏ニ囑シテ優勢軍ニ對スル寡少軍ノ戰術ヨリ軍ノ編制等ニ就テ講話シ近來稀ニ見ルノ快文字ニシテ誠ニ本邦軍界ノ一大光明タリ今本社其公刊ヲ許サレテ然ラバ果明ニ紹介スルヲ得タルノ月桂冠ヲ得ントラズ實ニ軍界ノ慶事タリ苟クモ本邦作戦ノ真諦ヲ解シ實ニ戰場ノ活人劍ヲ揮ヒ勝利ノ月桂冠ヲ得ントラズ實ニ軍界ノ慶事タリ苟クモ本邦作戦ノ真諦ヲ弄スルヲ好マズ蓋シ其眞價ノ如キハ一讀ヲ俟テハ自ラ了知セラルヘキヲ以テナリ。

◎發行所

振替貯金東京二〇九八七
電話新橋二六〇五

兵事雜誌社

東京市赤坂區表町二丁目一番地

研究會 著

範例的想定全

體裁菊判。紙數約百五十頁
三度刷除形配布圖十餘枚入
全一冊 金五十五錢
郵稅金六錢

數學には公理公式等ありて之を運用すれば如何なる難問題と雖も忽ち解決に何等の條理系統なからんや茲に於てか研究會の指導者某氏等が戰術研究の公理公式となすべしと想定二十種を案出し之を研究講話したるに大効「範例的想定」と命名し本社に請ひを容れて本「範例的想定」を發行するに至りしものなり。本書に掲ぐる想定は僅に廿素より少なしとせず然れども此の二十の想定を研究すれば他の多種多様の觀あり且つ復雜混淆せる想定に對しても分析解剖必ず其の歸着する所を發見するに足るべし、即ち本書の價値は多言を要せず左**定理的想定！ 範式的想定！**故に將來難局に處去就を決し幾多の想定に對して正當の解決を得んと欲せば先づ宜しく本書を繙れんとを 本書は目下兵書界に於て「決心問題」と着眼點の兄弟たるべしと大好評を博しつゝある

◎發行所

電話新橋二六〇五番
振替口座番號二〇九八七番

兵事雜誌社

東京市赤坂區表町二丁目

一 忽ち初版再版忽ち賣切第三版發行

○第一第二第三第四版忽ち賣切第五版發行
研究會 著

決心問題と着眼點

體裁優美頁數三餘頁
全一冊定價 金五拾錢
郵稅六錢

研究會の出す所曩に「作戰綱要」あり。幾何も無くして「改正步兵操典詳解」あり。又第三の研究として、本書「決心問題と着眼點」を刊行するの榮を荷へるは、顧みて本社欣懐措く能はざる所なり。
思にふ事物の成功するや否とは、一に其の着眼の敏なると否とに由り、又決心の如何に關するや固より大なり。換言すれば、着眼宜しくして適當の判斷之に伴ひ、判斷適正にして其の決心果敢なるに於ては、即ち少くとも先づ先制の利を攫得するものと謂ふべし。軍事上の事亦何ぞ異らん。一勝一敗、興亡隆替の跡、古來の戰史は歴然として之を指示せるに非ずや。
本書は即ち戰略上、戰術上、該二者の喫緊なる所以を述べ、以て各種の場合に於て、其の如何にすべきものなるかを縷述せるもの、もと陸軍大學受驗者、及特志者の爲に研究講話せるもの、請うて之を刊行するに當り、本社は刊行上自ら其の「着眼點」及「決心」の當を得たるを悦び、江湖に對しても亦「着眼點」及「決心」の機敏且果敢ならんことを勸む。蓋し之を繕くと一日早き時は、研究上修養上、即ち自ら機先を制するものなればなり。豈敢へて售るが爲にのみ爾か言はんや。

◎發行所 東京市赤坂表町二丁目一番地 兵事雜誌社
電話新橋二六〇五番

(前付の四)

晴軒居士 著

戰術想定作爲法全

一冊金五十錢
郵稅金四錢

想定之作爲の巧拙に因り被課研究者の研究の効益に其の差あるは勿論なり然るに想定は如何にして作爲すべきものなるや又想定は如何に讀むべきを至當とするやとの質問を受け答者も亦之が答解に苦しむとのことを屢々耳にし居りしに頃者某要職にある晴軒氏が二三篇學者の爲めに此の緊要なる問題を解決し與へたるを聞き馳せて其寓を訪ひ切に之が手記を讀ふと雖も氏は其公開を諾せられず論難數時に亘り予の語激して不親切者と呼ぶや氏は此の嫌惡すべし呼稱を厭ひ憤然として予に其の手記を授與されたり。
思ふに想定が如何にして作爲せらるるものなるやの疑問を抱くもの決して少しとなさざるべし本書は之を説明するに懇切を極め、情況に就き兵力に就き地形、地物に就き時間、時刻に就き將た又た季節、天候其他の素質に就き一々之を闡明し或は記載の方法を擧げ或は具備すべき條件を述べ更に出現すべき問題に就て詳細なる研究に次ぐに此の提案の下になれる想定を例示し各場合に亘りて周到なる用意と懇切なる説明書を以てし加ふるに巻末に附するに分隊、小隊、中隊より諸兵連合の聯隊、旅團等に至る迄の各場合の想定を以てし殆んど餘蘊なし且つ本書は管に想定之作爲法を研究するに止まらず想定によりて戰術を研究する者の爲にも亦極めて必要なる説明を與へある等眞に近來の快著なれば其の教育者たるに研究をたるとを問はず必ず一讀するの價値十分あり。

◎發行所 東京市赤坂區表町二丁目一番地 兵事雜誌社
電話新橋二六〇五番

研究會講話

戰術原則の由來と根源全

體裁菊判説明木版
七十餘個入製本本
製金文字入
全一冊 金七十五錢
送料 八錢

本書ノ非凡ノ價值アル事ハ世既ニ之ヲ知ル故ニ弊社ハ其價值ニ就キ嗚々スルヲ止メ唯ダ左ニ本書ノ結構及内容ヲ紹介スルニ講話者ノ序ヲ以テス。表現された用兵の原則は從來甚たしく單簡に取扱はれて居る然し此等の原則の本性を詳に知らんと欲したなら、その産れた母體を知らねばならぬ、その母體を知り産れ具合を知りさうして後に始めてその表現されて居る原則が眞に理解が出来ると謂ふものである。さうして此の原則を眞に理解し、またその母體を知つて居ればその産れた原則の變化應用を間違ひなからしめ得るのである。

それ故此の原則の母體と由來とを知ることが管にその原則を正當に理解し得るばかりでなくその應用をもその變化をも正當に實施運轉し得るのである。此理由て本講話を試みたのである序に謂ふて置くが此の講話を聴かれたら是を基として更に諸君の研究を進め或は之を深くし又は更に諸君自身の所有物たらしめて欲しいのである。

大正三年二月

研究會講話擔當者

東京市赤坂區表町二丁目一番地

發行所

電話新橋二六〇五
振替貯金口座二〇九八七

兵事雜誌社

兵棋界革新の新刊!!

新式兵棋詳解

體裁菊判。木板數個及附圖
付。製本本製金字金入
全一冊 金七十八錢
郵税 八錢

本書は江湖戰術研究に熱中せらるゝ諸賢の既に熟知せらるゝ研究會に於て本邦に於ける兵棋のオースリチーと稱せらるゝ某氏か其研究に基き講演せられたるものなり。

從來の兵棋は型に囚はれ非實戰的にして趣味も亦極めて低かりしか故に之を實施する者甚だ少なりしが如し。

某氏は深く之を慨し茲に此新式兵棋を唱導し敢て世界の進運に後れさらんことを期せり目下我が高等學府に於ては此の方法を採用せられあるに反し軍隊其他に於て依然舊套を脱せざるは我が軍事界の耻辱ならずとせんや是れ本社が特に研究會と因縁あるを幸ひ請ふて公刊し廣く江湖に紹介する所以なり。

發行所

振替貯金口座二〇九八七番
電話新橋二六〇五番

兵事雜誌社

東京市赤坂區表町二丁目一番地

本廣告を看過す勿れ

大評博切賣の第二所出版來りせ

統帥心理學全

體裁菊版紙數二百餘頁
全一冊 金四十錢
郵税六錢

天ノ時ハ地利ノ如カズ地ノ利ハ人ノ和ニ如カズト蓋シ古今ノ諸英雄已ニ戰法ノ大綱ハ統帥ノ術ニ存
スルヲ説キ人心ノ機密ヲ窺ヒテ之ヲ利用セリ北條早雲ノ三略ヲ講ゼシムルヤ其主將ノ法ハ務
メテ英雄ノ心ヲ攪ルニテ開卷ノ語ヲ聞キ予既ニ復タ之ヲ得タルト云フモ人心ノ機微ヲ無視
シテ克ク其効ヲ奏スルニ無キヲ知リ得ヘシニ存スルヲ思ヘハ指揮ト云ヒ統帥ト云フモ人心ノ機微ヲ無視
斷雲馳突氏早ク已ニ心ヲ關係ニ研究シツハ古今ノ書籍ヲ涉獵シ數多ノ歴史ヲ引證シ又タ學理ト實證ト
ニ徴シテ統帥ト云フモノハ軍心ヲ研究シツハ古今ノ書籍ヲ涉獵シ數多ノ歴史ヲ引證シ又タ學理ト實證ト
モ群衆心理ノ根柢ヲ探ルルニシテ軍心ヲ研究シツハ古今ノ書籍ヲ涉獵シ數多ノ歴史ヲ引證シ又タ學理ト實證ト
スル所ニ近シ兵書ヲ刊行シ少カラズト雖モ本書ノ如キハ實ニ稀ニ見ルベキモノ、是レヤガテ又タ本書
ノ價値ヲ近シスル所ノ刊行シ少カラズト雖モ本書ノ如キハ實ニ稀ニ見ルベキモノ、是レヤガテ又タ本書
以テ人心ノ機微ヲ伺ヒ之ガ關係ヲ究メサルヲ此方面ニ潛ムル者ハ勿論、軍隊統帥ノ職ニアル者ハ是ニ因
メテ大ナラシムルヲ得ベシ大方ノ諸賢徒ラニ此ノ言ノ壯ナルヲ疑ハズ先ツ左ノ目次ニ就テ其實價ヲ認
目次 第一編 群衆心理ノ概要 第一節 群衆心理ノ特徵 第二節 群衆心理ノ活動ナル行動ヲ執ルル特徵 第三節 群衆心理ノ活動ナル行動ヲ執ルル特徵
第二編 統帥心理ノ概要 第一節 統帥心理ノ特徵 第二節 統帥心理ノ活動ナル行動ヲ執ルル特徵 第三節 統帥心理ノ活動ナル行動ヲ執ルル特徵
第三編 戰術實施ノ指導 第一節 戰術實施ノ指導ノ意義 第二節 戰術實施ノ指導ノ方法 第三節 戰術實施ノ指導ノ結果
第四編 戰術實施ノ指導ノ要領 第一節 戰術實施ノ指導ノ要領 第二節 戰術實施ノ指導ノ要領 第三節 戰術實施ノ指導ノ要領
第五編 戰術實施ノ指導ノ要領 第一節 戰術實施ノ指導ノ要領 第二節 戰術實施ノ指導ノ要領 第三節 戰術實施ノ指導ノ要領
第六編 戰術實施ノ指導ノ要領 第一節 戰術實施ノ指導ノ要領 第二節 戰術實施ノ指導ノ要領 第三節 戰術實施ノ指導ノ要領
第七編 戰術實施ノ指導ノ要領 第一節 戰術實施ノ指導ノ要領 第二節 戰術實施ノ指導ノ要領 第三節 戰術實施ノ指導ノ要領
第八編 戰術實施ノ指導ノ要領 第一節 戰術實施ノ指導ノ要領 第二節 戰術實施ノ指導ノ要領 第三節 戰術實施ノ指導ノ要領
第九編 戰術實施ノ指導ノ要領 第一節 戰術實施ノ指導ノ要領 第二節 戰術實施ノ指導ノ要領 第三節 戰術實施ノ指導ノ要領
第十編 戰術實施ノ指導ノ要領 第一節 戰術實施ノ指導ノ要領 第二節 戰術實施ノ指導ノ要領 第三節 戰術實施ノ指導ノ要領

發行所

東京市赤坂區表町二丁目一
電話新橋二六〇五番

兵事雜誌社

研究會著 ◎唯一の戰術實施の指導書

野外戰術實施指導の要領全

體裁 四六判
用紙舶來上等洋紙
全一冊 金三十錢
郵税四錢

野外戰術實施及現地ニ於ケル戰術ノ講話實施法ハ將校團教育ニ極メテ必要ナルモノナルヲ以テ之ヲ
行ハザル所ナシ然ルニ其實實施法ヲ見ルニ指導者ノ未熟ナルト專修員ノ不馴ナルト依リ其成果所期ニ
反スルモノナキニアラズ從テ指導者ニシテ其指導ニ苦ミ其實施ハ極メテ困難ナルガ如ク思惟スルニ至
リ自信心ノ缺如ト其要領ニ不熟ナルトニヨリ其結果ヲ益々不良ナラシムルニ至ル而カモ現行ハ
ル、指導法ハ多ク範ヲ陸軍大學校ニ採ルモ此校ニ於ケル實施要領ハ到底將校團教育並ニ他ノ實施學校
初級學校ノ實施法ニ適セサルナリ本書ハ長ク斯導ノ研究ヲ積ミ且ツ
其實施ノ經驗豐富ニシテ新實施要領ノ開拓者ヲ以
テ任スル基氏ノ親切叮嚀之ガ指導要領ヲ敘述シタ
ルモノニシテ實ニ前記ノ缺點ヲ補正シ野外戰術實
施指導法ニ一明燈ヲ揚ゲタルモノナリ、江湖斯道ニ志アルモノハ
勿論教育者ト被教育者タルト問ハズ苟クモ新智識ニ觸レント欲スルモノハ見落スヘカラサル近時ノ
良著ナルコト本社確證スル所ナリ。

發行所

東京市赤坂區表町二丁目一
電話新橋三二六〇五

兵事雜誌社

好評嘖々たる新刊案内

陸軍歩兵中佐 菱刈 惟隆 校閲
陸軍歩兵少佐 河澤 活一 校閲
陸軍歩兵大尉 三澤 水殿 校閲
著

陣中勤務詳解

體裁 菊判 頁數 三百餘頁
各冊 上下二冊 全五冊
木版 數十個 入
各冊 金五十錢 宛
郵 稅 金六十錢 宛

陣中ノ諸勤務ニ關スル事項ハ一ニ我野外要務令ニ遵據セザルベカラズ世人動モスレバ之ヲ他ノ一般戰術ト同一視シ其原則ニ違反セザル限リ自己ノ胸裏ヨリ編ミ出シ得ベシトナス然レモ我野外要務令ハ名ナラザルニ勤務令ナリ難ナリニ條規ニ違背シ其範圍ヲ索ルベカラズ然ルモ徒ニ皮想淺薄ニシテ其精神ヲ闡明スルニ至ラズ而シテ實ニ兵ヲ以テ其勤務ニ服スルヤ單ニ習慣ニ關セズ國家ノ存亡ニ影響セザルナラバ且平然ラザルカ幸ニ平時ニ於ケル過失粗漏アルハ實ニ曉天ノ星ノモ一且平然ラザルカ幸ニ平時ニ於ケル過失粗漏アルハ實ニ曉天ノ星ノ方今戰術研究ノ書類ニ到リテハ其數極メテ多ク其條文ノ精確ニシテ實ニ勤務ニ關スル方則ニ遵ハザルハ實ニ曉天ノ星ノ如ク參々トシテ推獎ス指ヲ屈スルニ到ラズ殊ニ初級幹部ノ實務施行ニ資スルモノニ到リテハ實ニ曉天ノ星ノニ本書ヲ世ニ著者ガ多年ノ研究ニ到リテハ其數極メテ多ク其條文ノ精確ニシテ實ニ勤務ニ關スル方則ニ遵ハザルハ實ニ曉天ノ星ノ切詳密ナル校正ヲ經タルモノナリ其解釋ノ適切ニシテ實ニ勤務ニ關スル方則ニ遵ハザルハ實ニ曉天ノ星ノ界稀ニ見ル良著ナリ其勤務ニ其研究ニ資セラレニ備ヘ以テ

◎發行所

東京市赤坂區表町二ノ九八七番
振替貯金口座二〇九八七番

兵事雜誌社

◎見よ看よ好評嘖々忽ち第三版發行の本書を
研究會 著

改正騎兵操典詳解全

體裁 菊判
頁數 三百餘頁
正價 金七十五錢
郵 稅 八錢

本書は讀書界に於て破天荒の大好評を博し未だ僅々年餘にして版を重ぬること九回の盛譽を擔ひたる改正歩兵操典詳解改正野戰砲兵操典詳解、戰略戰術詳解等と同じく研究會の産物なれば、其の解説の精確なると其の講述の懇篤なるは今更改めて弊社が茲に喋々する迄もなく讀者は既に了知する所ならん、宜なる哉發行早々好評嘖々たり

◎發行所

東京市赤坂區表町二丁目一番地
振替貯金口座二〇九八七番
電話新橋二六〇五番

兵事雜誌社

好評初版再版第三版發行

研究會 著

改正野戰砲兵操典詳解

體裁 菊判
紙數 三百餘頁
全一冊 金七十錢
郵稅 八錢

改正野戰砲兵操典ハ發布セラル本書ガ最近大戦役ノ重要ナル教訓ヲ骨子トシテ改正セラレタル實典タルハ云フマデモナシ而モ條文ハ簡潔ニシテ意味極メテ深長之ヲ會得シテ其ノ神髓ヲ悟了スルニアラザレバ運用ノ妙ヲ得ルハ能ハサルナリ是ニ於テカ其ノ神髓ヲ味ハシムル詳解書ノ需用起ル曩ニ步兵操典ノ改正アルヤ幸ニ世人ノ敬仰セル某々有爲ノ將校特ニ會ヲ結ンテ之ガ攷究ニ從事セラレ研鑽頗ル力メテ得直ニ印刷發行スルヤ世人ノ歡迎果シテ目覺シ切ニ請ヒテ之ガ公表ノ許可ヲ得直ニ印刷發行スルヤ世人ノ歡迎果シテ目覺シキモノアリ暮年ナラスシテ五版ヲ重スルニ至レリ今ヤ本操典ノ發布アリ大方ノ望マルル所亦前ノ步兵操典詳解ノ如キ良書ノ出版ニアルベキナリ前著者諸彦ニ請ヒテ茲ニ前著同様ノ詳解ヲ公ニスル光榮ヲ荷ヘリ其ノ内容ノ斯界ノ渴望ヲ醫スルニ足ルベキハ吾人ノ喋々ヲ待タズシテ明ナル所苟モ最新知識ヲ獲得ニ於テ他人ニ一步ヲ讓ラザラント欲スル士ハ速ニ一本ヲ左右ヘ備ヘラレ

東京市赤坂區表町二丁目一番地

◎發行所

電話新橋二六〇五番
振替貯金番號二〇九八七

兵事雜誌社

(前付の三)

研究會員某著 ◎第二版發行

實驗に因る夜間演習教育全

體裁 菊判
全一冊 金五十錢
郵稅 六錢

火器の進歩と日露戦争の實驗は吾人に夜間行動の必要を大に感せしむるに至れり然るに夜間の行動たるや晝間の行動と異なり心理的方面の制肘妨害を受くること實に多大なり故に夜間行動の教育は常に此心理的方面の研究を基礎として教育せざるべからず。

本書は即ち此方面より多年實驗攷究したる其成稿にして實に此種教育書の泰斗と云ふも過言にあらずとは之れ世評なれば弊社は本書の價値に就き嗚々するを止め左に著者の緒言を掲げ以て廣告に換ゆ、

緒言

日露戦役後夜間演習教育ノ必要ヲ唱フル聲年々ニ喧シ之レ其自然ノ要求是ヲ然ラシムルモノニアラスシテ何ソヤ。予亦夜間演習教育ニ多大ノ趣味ヲ有シ戦役後之ガ研究ニ焦心シツ、アリ而シテ今ヤ數年ノ經驗ト先輩諸官ノ甚大ナル助言ト指導トニ依リテ其經驗ヲ綴録シテ冊子ヲ作セリ本書ヲシテ更ニ良好ナルモノヲラシムルハ實ニ大方諸賢ノ貴重ナル實驗ノ發表ト其懇篤ナル助言トニアリ敢テ軍國ノ爲メニ忠實ナル研究ヲ望ミ同時ニ本書ヲ編スルニ當リ甚大ノ助言ヲ與ヘラレタル某校教官諸賢ノ厚意ニ對シ深厚ナル敬意ヲ表ス。

明治四十四年八月

著者誌

東京市赤坂區表町二丁目一番地

◎發行所

電話新橋二六〇五番
振替貯金二〇九八七番

兵事雜誌社

見よ大評判の本を書け

賣切中なしり本の改訂増補は來りせ

◎改訂増補第十一版

改正步兵操典詳解

下上

體裁菊判紙數各約三百頁宛

上卷一冊 郵金六十
下卷一冊 郵金六十
稅五 稅六十
錢錢錢

數回ノ大戰役ヲ經テ今ヤ我が帝國ハ列強先進國ノ伍伴ニ入り最新ノ經驗者トシテ世界軍國ノ間ニ大ニ重キヲ爲セリ宜ナル哉其ノ新經驗ニ準據シテ編成セラレタル步兵操典ノ公示セラレ、ヤ列強競ウテ之ヲ翻譯シ一日モ新智識ニ後レザラントシテ其ノ研究ニ努力スルコトヤ此ノ如キハ實ニ我が陸軍ノ至大ナル名譽ト言ハザル可カラズ然リト雖モ世運ハ須臾モ停滯セズ吾人ニシテ永ク此ノ名譽ヲ失墜セザラントコトヲ欲セバ必ズ之ニ對スル責任ノ益々大ヲ加フルコトヲ覺悟セザルベカラズ著者諸氏深ク感ゼラル、所アリ特ニ會ヲ結ンデ操典ノ研究ニ其ノ熱誠ヲ注ギ衆思ヲ集メテ其ノ結果ヲ輯録シ以テ曩ニ本書ヲ公ニセラレタリ世間同感ノ士亦乏シカラズ半歳ニシテ版ヲ重ヌルコト四回ニ達シ、供給動モスレバ需用ニ伴ハザラントス而モ其ノ開會ノ事業ハ益進行シ研究日ニ日ニ新ナルモノアリ乃チ今又之ヲ増刷スルノ機ニ際シテ更ニ改訂増補ヲ試ミ改訂増補シテ面目ヲ新ニスルニ至レリ其ノ研究ノ進境ハ大ニ人意ヲ強ウスルニ足ルモノアリ必ズヤ讀者ノ渴望ヲ醫スルニ餘リアラン讀者其ノ内容ヲ檢シテ此ノ讚辭ノ溢美ニアラザルヲ知ラレヨ

◎發行所

電話新橋二六〇五番
振替貯金番號二〇九八七

兵事雜誌社

東京市赤坂區表町二丁目一番地

御待兼の訂正大増補第十版發行



體裁四六判半裁。頁數一千餘頁
製本本製金文字入。附圖並箱附
全一冊 金壹圓 小包料金八錢

好評噴々版を重ねること第十版に及びし本書が如何に上元帥より下士に至るまで階級と兵科とを論ぜず指揮官たり幹部たる者に必須至便の書なるかを紹介せん爲め左に編者の自序を掲げ以て廣告に換ふ。

◎發行所

東京市赤坂區表町二丁目一番地
(電話新橋二六〇五番)

兵事雜誌社

余ヤ不敏固ヨリ人ノ師長ヲ以テ自任スル者ニアラサレトモ佛伴ニシテ陸軍大學ノ門ヲ出テタルノ光榮ニ浴セルヲ往々青年將校諸子ノ推獎ヲ受ケ學術上ノ研鑽實ニ贊同感答スルノ任ニ當ラン事ヲ懇請セラレ之ヲ二三同學ノ僚友ニ問クニ亦同僚ナリトイフ是ニ於テ吾人相圖リテ一個ノ打合せ研究会ヲ組織シ方今最先ノ急務トシテ屢々依頼ヲ受ケタル陣中必携ノ材料ヲ蒐集セリ其ノ範圍ハ固ヨリ軍事全般ニ亘リ原則ノ研究ニ應用作業ニ野外ノ實施ニ計畫施設ニ必須事項ハ悉皆之ヲ網羅シテ遺憾ナカラシメシトナリ期セリ此ノ如キ事業ハ一人ノ力ヲ以テシテハ容易ニ功ヲ舉ヘ難キ虞アレトモ幸ニシテ數人ノ戮力ヲ得テ結果個個個個ノ失ヲ免ルルヲ得タルハ余ノ欣喜ニ堪ハサル所ナリ。而シテ當初ノ所期ハ勿論之ヲ世ニ公ニセんとスルニアラス以テ萬學ナル知己ノ懇請ニ酬イントスルヨリ他意ナカリシガ兵事雜誌社主側マ之ヲ耳ニシ來リテ余ヲ助ヒ之ヲ秘シテ僅ニ二三子ノ個々爾ルニ止ムルノ理由ナキナリ且ツ熱心ナル研究者ガ千金ノ時間ヲ費シテ傳寫ヲ爲スノ徒勞ヲ吝ミ切ニ之ヲ鉛筆ニ附シテ以テ廣ク同好者ヲ益セン事ヲ請フ余等其ノ事ノ意外ナルヲ思フト雖モ事公益ニ存ストセハ又強ヒテ之ヲ拒ムノ辭ナラセズ即チ更ニ嚴重ナル選擇ヲ施シテ終ニ之ヲ公刊スルニ至レリ。終ニ臨ンテ余ハ表紙ニ刻セル徒歩計ヲ紹介セサルヘカラス是ハ千々和中尉ノ新案ニ成リ陸軍戸山學校ノ之ヲ採納セルモノ頃者噴々タル好評ヲ有ス本書ニ其ノ使用法ヲ附録セルガ故ニ讀者諸君シテ之ヲ實驗セハ考案者ノ功績ノ偉大ナルヲ認ムルヲ得ヘシ即チ之ニヨリテ距離ノ測定ト距離ニ適應スル運動ノ計畫トヲ正確ニスルヲ得ヘシ余ハ陸軍戸山學校並ニ考案者ガ之ガ版權ヲ寄與サレ本誌ノ價値ニ一役ノ重キヲ加フルヲ得シメラレタル好意ヲ感謝スル者ナリ。

五月吉日

著者一人敬

見よ戦史は戦略戦術基礎なり

研究會著 ◎大好評全部出来

一册金二十五銭 郵税金四銭

戦史摘要論評 全六册

○鴨綠江會戰之卷
○得勝寺會戰之卷
○遼陽會戰之卷
○沙河會戰之卷
○黑溝會戰之卷
○奉天會戰之卷

戦史を研究せざれば以て典令範を解する能はざるなり、戦史を研究せざれば以て戦術戦略を語るべからざるなり蓋し典令範の一字一句は悉く戦史の賜にして戦術戦略は流血累屍の反照なればなり、此の故に戦史の證明なく戦史の勸告なく戦史の憑據なく、戦史の否定なきものは空理なり空論なり、趙某の兵法なり人を損し隊を耗し國を亡ぼすものなり天下斯の如く危険なるものありや軍人にして自ら此の赤子の利刀を用ふるに甘んじ人を損し隊を耗し國を亡ぼすを憂せざるものありや苟くも之を憂へて而かも戦史を研究せざるものありや吾社は因縁深く且つ軍事界に重要な位置を占むる研究會に強請し其の研究に成る戦史を得て之を公刊せり其の價値の如きは改めて喋々するを要せざるべし請ふ本書一部を求めて以て前述の憂ひを除去し空論家たるを免れ賜へ

東京市赤坂町表町二丁目一番地

◎發行所

振替貯金口座東京二〇九八七番 電話新橋二六〇五番

兵事雜誌社

軍隊教育實驗會著

模範的小隊長 全

體裁 本上製 全一册 金三十五銭 郵税金四銭

從來青年將校の職責を説けるもの少しとせず然れども徒らに理想に走り理論に陥り之を具體的に開陳せしものなきは聊か隔靴搔痒の感なき能はざるなり青年將校修養の材料に資するものなりと相圖ざりしが本書は著者が嘗て之を遺憾となし青年將校修養の材料に資するものなりと相圖り同人等のしるしを以て之を遺憾となし青年將校修養の材料に資するものなりと相圖り近なる實例を擧げし五十人の模範的小隊長に就き詮衡得難き小隊の座右銘 指南車 なるべき好著 借覽又寫取を申込む者頻なりとの事を斯の如き有益なる書を一部人士の専用に委せんより之を公刊廣く全軍青年將校に益々向上發展の資に供し將校生徒諸君は以て將來の目標を捉へ上長官は以て後指導の參考とせられん

東京市赤坂區表町二丁目一番地

◎發行所

電話新橋二六〇五番 振替貯金東京二〇九八七番

兵事雜誌社

好評嘖々たる新刊

理財者の燈明!! 羅針盤!!

軍隊教育研究會著

中隊經理詳解

體裁 四六判
全一冊 金三十錢
郵稅四錢

古人曰ク衣食足りテ禮節ヲ知ルト衣食ハ實ニ吾人ガ起居中寸時モ離ルベカラザルモノナリ而シテ中隊經理ハ中隊ニ於ケル衣食ノ概容ト各級幹部ノ職責トヲ陳述シ併セテ官給品取扱上ノ精神訓話ヲ骨髓トセル中隊家庭ノ基礎ニシテ又大黒柱タル好著ナリ

思フニ近時兵書ノ刊行少カラズト雖モ良ク中隊家庭ノ衣食住ヲ網羅シ内務教育ノ基礎ヲ完成セントセルモノハ本書ニ於テ始メテ見ル所ナリ本書ハ實ニ中隊家庭ノ根本タル兵卒躰ト中隊經濟トノ嚴師畏友ニシテ又實ニ中隊幹部ノ好師友タリ

◎發行所

東京市赤坂區表町
振替貯金口座二〇九八七

兵事雜誌社

軍隊教育精神界光明

幹部用訓言錄全

體裁 菊版四十截ち
ボイケット用
紙上等 舶來紙
全一冊 金三十錢
郵稅四錢

精神教育界革命命書

軍隊教育令ノ改正ト共ニ軍隊ノ精神教育界ニ一新紀元ヲ畫セリ此時ニ當リ將校下士諸氏ノ率先躬行ト古今聖典ノ研究トハ教育ノ本旨ニ合スル唯一ノ手段ナリ本書ハ實ニ軍隊教育界ニ於テ超然タル人格ヲ有スル某將軍ノ收録ヲ請ヒ出版公ニセルモノ而テ其内容ヲ見ルニ畏クモ 明治天皇ノ御製ヲ始メトシ奉リ古今東西ノ金言、名將ノ訓戒先哲ノ名言、等 和歌アリ俳句アリ格言アリ 教訓アリ俚諺アリ苟クモ軍隊教育上必要ナル教訓ハ細大洩ラサス 二千有餘ヲ集録シアルガ故ニ兵卒教育上寸時モ缺クベカラサル良著ニシテ實ニ大正軍隊精神教育界ノ革命タリ又光明 塔リ敢テ江湖熱誠ナル將校下士諸ノタメニ一讀ヲ勸ム

◎發行所

東京市赤坂區表町二丁目一番地
電話 新橋二〇六番
振替貯金口座二〇九八七番

兵事雜誌社

兵事雜誌社出版略目

Table of military books with columns for author (著譯者), title (書名), volume (冊数), price (正價), and publisher (郵税). Includes titles like '大正野外要務詳解', '戰術詳解', '新兵教育の實験', '射擊教練の私解', '決心問題と着眼點', '野外戰術實施', '大元帥陛下御製', '徵兵並陸海軍志願者必携', '各兵科對壕及坑道', '教育實施資料', '日獨佛戰術比較對照論', '新舊步兵操典對照比較', '砲兵小戰術', '勅諭讀法義解', '白兵の神髓', '各種教練と體操', '日本野外要務令詳解', '獨逸野外要務令詳解'.

Table of military books with columns for author (著譯者), title (書名), volume (冊数), price (正價), and publisher (郵税). Includes titles like '步兵操典改正草案評釋', '改訂野外要務令の應用', '步兵教練の要', '應用戰術講授錄', '戰術綱要', '戰術應用例', '戰術再審問題解答', '戰術原則の應用', '夜間戰術', '野戰築城', '步兵各個教練', '戰術想定作爲法', '兵器學', '應用戰術研究錄', '圖上戰術研究錄'.

丸山 著	本社編輯	若林 少佐著	木村中佐講述	後藤少佐講述	武田少將校閱	宇野 教授著	石村 教授著	磯山氏 著	井上博士講演	浪美 大尉著	某氏の著	某氏の著	I M 氏著	吉野中佐校正	東條 中將著	A B 氏著	奥田 大尉著	B M 氏譯	大原 少佐著	井上 大尉著
武田中尉	海軍生	海軍生	海軍生	海軍生	海軍生	海軍生	海軍生	海軍生	海軍生	海軍生	海軍生	海軍生	海軍生	海軍生	海軍生	海軍生	海軍生	海軍生	海軍生	海軍生
全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册
〇・三	〇・三	〇・三	〇・三	〇・三	〇・三	〇・三	〇・三	〇・三	〇・三	〇・三	〇・三	〇・三	〇・三	〇・三	〇・三	〇・三	〇・三	〇・三	〇・三	〇・三
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
相良大尉共著	相良大尉共著	相良大尉共著	相良大尉共著	相良大尉共著	相良大尉共著	相良大尉共著	相良大尉共著	相良大尉共著	相良大尉共著	相良大尉共著	相良大尉共著	相良大尉共著	相良大尉共著	相良大尉共著	相良大尉共著	相良大尉共著	相良大尉共著	相良大尉共著	相良大尉共著	相良大尉共著
游泳教育	進化せる幕的	雪中強行軍寫真額面	近衛步兵第二聯隊眞影	在郷軍人必携	在郷將校心得	清韓兩國地圖	清韓兩國地圖	清韓兩國地圖	清韓兩國地圖	清韓兩國地圖	清韓兩國地圖	清韓兩國地圖	清韓兩國地圖	清韓兩國地圖	清韓兩國地圖	清韓兩國地圖	清韓兩國地圖	清韓兩國地圖	清韓兩國地圖	清韓兩國地圖
全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册
〇・三	〇・三	〇・三	〇・三	〇・三	〇・三	〇・三	〇・三	〇・三	〇・三	〇・三	〇・三	〇・三	〇・三	〇・三	〇・三	〇・三	〇・三	〇・三	〇・三	〇・三
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
相良大尉共著	相良大尉共著	相良大尉共著	相良大尉共著	相良大尉共著	相良大尉共著	相良大尉共著	相良大尉共著	相良大尉共著	相良大尉共著	相良大尉共著	相良大尉共著	相良大尉共著	相良大尉共著	相良大尉共著	相良大尉共著	相良大尉共著	相良大尉共著	相良大尉共著	相良大尉共著	相良大尉共著
帝國國難の夢	東洋の大波瀾	清國動亂史	清國動亂史	清國動亂史	清國動亂史	清國動亂史	清國動亂史	清國動亂史	清國動亂史	清國動亂史	清國動亂史	清國動亂史	清國動亂史	清國動亂史	清國動亂史	清國動亂史	清國動亂史	清國動亂史	清國動亂史	清國動亂史
全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册
〇・三	〇・三	〇・三	〇・三	〇・三	〇・三	〇・三	〇・三	〇・三	〇・三	〇・三	〇・三	〇・三	〇・三	〇・三	〇・三	〇・三	〇・三	〇・三	〇・三	〇・三
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
相良大尉共著	相良大尉共著	相良大尉共著	相良大尉共著	相良大尉共著	相良大尉共著	相良大尉共著	相良大尉共著	相良大尉共著	相良大尉共著	相良大尉共著	相良大尉共著	相良大尉共著	相良大尉共著	相良大尉共著	相良大尉共著	相良大尉共著	相良大尉共著	相良大尉共著	相良大尉共著	相良大尉共著

發行所

兵事雜誌社

東京市赤阪區表町二丁目一番地
電話新橋二六〇五番
振替貯金口座二〇九八七番

317
314

終